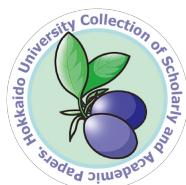




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学教育GP「大学博物館から拓く学生教育の未来」報告書
Author(s)	北海道大学教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」事務局
Citation	北海道大学教育GP「大学博物館から拓く学生教育の未来」報告書, 2008年度, 1-53
Issue Date	2009-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59613
Type	book
File Information	201507291531.pdf





2008 年度 北海道大学教育 GP シンポジウム

「大学博物館から拓く 学生教育の未来」報告書



北海道大学教育 GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」事務局

〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 北大総合博物館内

TEL & FAX : 011-706-4704

<http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/activity/edu-gp/>



北海道大学教育 GP
「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」

2008年度 北海道大学教育 GP シンポジウム
「大学博物館から拓く学生教育の未来」
報告書

2008 年度 北海道大学教育 GP シンポジウム
「大学博物館から拓く学生教育の未来」

プログラム

開催日：2009 年 1 月 20 日（火）

開催場所：北海道大学総合博物館 1 階「知の交流」コーナー

13:30 ～ 13:40 挨拶

脇田 稔（北海道大学理事・副学長、教育改革室室長）

13:40 ～ 13:45 シンポジウム趣旨説明

高橋 英樹（北海道大学総合博物館 教授）

13:45 ～ 14:30 「ミュージアム・テクノロジーと複合教育プログラム」

西野 嘉章（東京大学総合研究博物館 教授）

14:30 ～ 15:15 「大学博物館で体験型全人教育」

大野 照文（京都大学総合博物館 教授）

15:15 ～ 15:30 休憩

15:30 ～ 16:15 「学生とともに研究を開く展覧会 ―トラベリング・ミュージアム in 台湾の実践から―」

落合 雪野（鹿児島大学総合研究博物館 准教授）

16:15 ～ 17:00 「北大総合博物館における学生教育の展開」

高橋 英樹（北海道大学総合博物館 教授）

湯浅 万紀子（北海道大学総合博物館 准教授）

17:00 ～ 17:30 総合討論

目 次

はじめに	1
挨拶	2
趣旨説明	4
ミュージアム・テクノロジーと複合教育プログラム	6
大学博物館で体験型全人教育	16
学生とともに研究を開く展覧会—トラベリング・ミュージアム in 台湾の実践から—	25
北大総合博物館における学生教育の展開（前半）	35
北大総合博物館における学生教育の展開（後半）	39
総合討論	47

はじめに

本書は、平成 21 年 1 月 20 日に北海道大学総合博物館 1 階「知の交流」コーナーにおいて開催された 2008 年度北海道大学教育 GP シンポジウム「大学博物館から拓く学生教育の未来」の成果報告書である。

北海道大学の「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」は、平成 20 - 22 年度の予定で文部科学省の教育 GP に採択された。このプロジェクトを遂行する上では、大学内の教育システム整備が最も重要だが、同時に大学博物館の存在意義を高めるきっかけにしたいという我々の思いもある。

本成果報告書は口頭発表の記録という形式をとっており、大学博物館がもつ教育分野の潜在能力や課題が浮き彫りにされていると思う。シンポジウムに参加できなかった方々にも、当日の臨場感をあじわって頂き、大学博物館がもつ可能性と課題についての思いを共有して頂ければ幸いである。

平成 21 年 3 月

北海道大学教育 GP 事業推進責任者
高橋 英樹

挨拶

脇田 稔

皆さん、こんにちは。お足元が悪いところ、大雪の中をお集まりいただきましてありがとうございます。教育担当理事の脇田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに簡単にご挨拶をさせていただきます。本日のシンポジウム「大学博物館から拓く学生教育の未来」は、2008年度の文部科学省の教育支援プログラム、教育GPと短縮形で呼びますが、そのプログラムの中の計画の1つでございます。

博物館と申しますと、科学博物館、民族博物館、歴史博物館、あるいはヨーロッパでは美術史博物館、美術館のことですが、いろいろな博物館があります。また、地域によってあるいはテーマによっていろいろなものが展示される美術館や博物館もございます。

この北海道大学総合博物館というのは特定の領域に偏らない、文系、理系、これらを含めた北海道大学がカバーしている領域すべてを表すということになっております。偏らないということは良いことなのですが、悪くすると総花的、玉虫色、広く浅くというような欠点も出てくるのでありますけれども、この北大総合博物館の方々は十分それを認識されていると思っております。

博物館の機能というのは、まず標本の収集が最初にございまして、それを分類、保管して、それからテーマ別に、あるいは類型別にいろいろな展示をするというのが博物館の一番大きな機能でございます。それが研究に、あるいは教育に対して、奉仕をするというのは言い過ぎですけども、いろいろな情報を提供するというにつなげてきて、このGPもその教育との関連性ということで採択されたわけでございます。

展示ということで最近も感心する経験をしました。私は解剖学が専門でございまして、歯に関する仕事が多かったので、外国に行くと人類学博物館へよく行きます。去年も学会の帰り途にパリで人類学博物館へ行きましたら、特別展示で「ヒトの形の差はどこから来るのか」というような展示がありました。最終的には遺伝の説明になるのですが、身長、目や肌の色、毛髪の性質などからはじまって、小学生にも分かりやすいよう、非常に魅力的に展示してありました。このように展示は特別展示、企画展示という形として、いろいろなアイデアで、いくらでも教育の材料になると思っております。

また学芸員の養成というのも博物館の教育の1つでございますし、学生教育、大学院の教育にもいろいろなことで使えます。本日は高校生の方も来ておられますけども、教育というどうしても、教室で勉強することである、あるいは文系だとゼミナールが、理系だと実習や実験があったりする、という、それだけが教育というようにとらえられます。最近はフィールドということが言われていまして、学外でいろいろなデータを取る授業もあります。ただし、データを取っただけではだめなので、それを整理・分析して、何か新しいことを見つけなければいけない。その場としての博物館は大変に重要だと思います。

博物館には整理・分析の参考資料としてたくさんの標本がございます。それから優れた助言者、博物館職員がたくさんおります。ですから、このような資産を使って、そういう教育を発展させることが重要だと思います。このプログラムの骨子でございます博物館での教育ということを中心にして、今日の講演が行われることになっております。私も抄録を拝見いたしまして、大変面白い、興味のあることがたくさん発表されるということが分かりました。本日は都合があつてこれだけで帰らなければならないので、大変残念に思っています。

教育と研究に対して、大学の博物館はどういう関与ができるか、どのように協力ができるか、何を提

供できるかということテーマとして、本日いろいろな取り組み、アイデアが発表されることになって
おります。今日の午後いっぱいお考えいただいて、皆様方それぞれの参考にしていただければと思いま
す。大学ですから、まず教育というのが最初に来ているのでございます。大学博物館として、今後皆さ
んと連携をして、たくさんの教育プログラムに貢献していきたいと考えております。

この北海道大学総合博物館をどうぞよろしく今後ともご支援くださいということを最後をお願いいた
しまして、挨拶に代えさせていただきます。本日はありがとうございます。

趣旨説明

高橋 英樹

今、ご紹介ありましたように、教育 GP という、後でもまた北大の事例を話すときにご紹介しますが、そういうプロジェクトに当たりまして、それをきっかけとして今回のシンポジウムを開いております。

背景としては、2つあるかなと思うのですが、大学における学生教育ということと大学博物館ということだと思うのです。まず、大学における学生教育について、ちょっと個人的な経験をお話しさせていただくと、私には3人子供がいます。みんなもう大学は出たのですが、いずれも私立大学に行って卒業しました。そうしますと、私立大学の学生教育というのは非常に熱心で、親のところに成績が送られてくるのです。これは、僕は北大を出たわけじゃないので分からないのですが、おそらくやっていないのではないかなと思うのです。親としてはそういうのを見て、子供がちゃんとやっているかなとか、この辺がちょっとだめだなとか。おそらく、あれで大学にあんまり出てきていないとか、そんなことにつながるのではないかなと思います。

もう1つ印象的だったのは、卒業式のときに全学の卒業式はもちろんあるのですが、学科ごとの、あるいは専攻ごとの小さなまとまりの卒業式をやります。そういうところに親が行けて、一緒に先生と子供たちの卒業式の場面に参加できる。そこでいろいろな賞があります。卒論で頑張った賞とか、いろいろなものがあって、みんなでわいわいとやって。そういう成果も一緒に親が楽しめるということがありまして、やっぱり大学の教育と言っても、いろいろさまざまだなということを感じています。

今回のシンポジウムでは、大学の教育の在り方については、ちょっと大きな話です。そこはこれからのテーマということですが、今回は「大学博物館が拓く学生教育の未来」というテーマで、大学博物館がどういう大学の学生教育に貢献できるかというお話に絞っていきたいと思っています。

皆さん、ご存じのように、今ほとんどの日本の大学には大学博物館というのができています。それで一般の方たちはおそらく博物館、大学博物館と言うと、やっぱり展示があるのかなというのが1つある。もう1つは、ほとんどの大学博物館がなぜできたかという、第一義的には学術標本資料です。これが縦割りの学部では管理できなくなってきて、大学全体として責任を持って見ていこうと。この2つがおそらく大きな目的だったと思うのですが、ほとんどの大学の博物館はそこのみで大変な状況で、もう一歩進んだ学生教育にどれだけ関与していくかというところが、これからの課題ではないかなと思っています。

大学博物館ができて、東大の博物館が一番早かったのですが、10年もうたっているわけです。日本の大学の中で、大学博物館は展示や学術資料という、ほかの学科や専攻にはないような非常に面白い特徴を持っているのですが、それを教育の方には生かしきれてはいない、まだまだですね。これから生かしていかなきゃいけないという現状があるので、そういう話ができればいいかなと思っています。

それと、おそらく今日の話の中で出てくる、そういういろいろ良い特徴を使っていきたいところなのですが、実際にはいろいろな博物館の事情というのが大学の中でありまして、大学博物館に学生は所属してないのです。学生というのは常に学部とか、そういうすでにある部局の方に所属している。博物館はそういったいろいろな学部、あるいは最初の教養部というお話でしたら、そこに出張して行って、いろいろな教育をする、支援するというような立場なのです。この辺がやはり博物館にとっては厳しいところで、なかなか責任を持って学生教育に参加できない。今のところは、そういった側面もある。この辺は大学全体の中で、どういうふうに博物館を生かしていくかという議論が起きてこない、なかなか突破できないような弱点と言いましょ、問題点がまだまだあると考えています。

それで今回は4つの講演をお願いしております。今、言った大学博物館の中では学生教育にかなり熱心で、先駆的な、先進的な事例ということになると思います。こういった事例、北大が第4番目ですし、鹿児島大が第3番目ということで、日本中の北から南までの例を。なかなか普段は博物館の学生教育については聞く機会はありませんので、貴重な機会だと思います。皆さんから質問やご意見を積極的にいただきたいと思います。

それぞれの講演ごとに、5分ぐらい何とか早めに終わっていただいて、最後にちょっと質疑応答を各講演ごとにやりまして、最後にまた全体の総合討論みたいな形にしたいと考えています。

ミュージアム・テクノロジーと複合教育プログラム

西野 嘉章

本日は、「ミュージアム・テクノロジーと複合教育プログラム」という演題で、東京大学の総合研究博物館における教育とのかかわりについて、お話をさせて頂きたいと思います。

私も東京大学総合研究博物館は、2002年10月にミュージアム・テクノロジー研究部門という寄附研究部門を立ち上げました。ミュージアム・テクノロジーというのは私の造語です。日本語で博物館工学寄附研究部門と呼ぶこともあります。21世紀のミュージアムはいかにあるべきか、そのことについてハードとソフトの両面から考えるというのが、この研究部門の課題です。

ご承知の通り、現代はなにごとにつけ物事を細分化して考える時代です。それが極端に進行し、アトム化を超えて、ナノ化にまで至っているのが現状です。思考が細分化されるなかで、もっと包括的、統合的、俯瞰的に全体を眺めるという視点を復元しなければならない、そういう考えを博物館事業のなかで社会に問うことができないだろうか、大学博物館をベースにして、物事を包括的、全体的、統合的に眺め返す視点の大切さをいまいちど問い直してみたい、と考えたわけです。この研究部門を立ち上げるにあたって、私たちの掲げたマニフェストには3つのキーワードがありました。1つ目は「斬新なアイデア」、2つ目は「賢明な知恵」、3つ目は「優美なデザイン」です。これらの3つのキーワードを核にして、それらの統合を目指すような実験工房でありたい、と主張したのです。

「斬新なアイデア」とか、「賢明な知恵」とか、「優美なデザイン」とか、言葉にするとごく当たり前のものではありませんが、そうしたものを個々に実現し、加えてそれら3者を複合して、1つの統合体を作り上げるというのは容易ではありません。それを試みる場として、私たちは「実験展示」という概念の定着に努力を傾けています。

「実験展示」というのは、もちろん、ミュージアム・テクノロジー寄附研究部門の活動にのみ関わりません。大学博物館を立ち上げるときから、すでに使い始めていたからです。大学博物館の展示というのは、そもそもが1つの「実験」である、したがって、自由な発想で、自由に事柄を遂行するに如くわない。その自由さを保証するための安全弁として「実験展示」というコンセプトを使い始めたわけです。ところが、これが、なかなか使い勝手の良いコンセプトなのです。一般のミュージアムは、1個の完成された展示コンテンツを社会に向けて発信提供する。それに対し、大学博物館は、未完成なものかもしれないが、より実験的な性格の強いコンテンツを社会に、試みとして、問うことができるのではないかと、そうしたスタンスを「実験展示」という言葉は担保してくれるからです。

あらかじめお断りしておきますが、これからお話しする内容は、大学博物館の活動の全体ではありません。全体のごく一部に過ぎないという前提の下で、私の話をお聞き下さい。さもないと、東大の博物館はこのようなことだけやっているのか、との誤解を生じる虞がありますから。

皆様のお手元にありますレジュメのなかを書いておきましたが、本日は3つの事例を取り上げることにします。

第1の事例は、博物館の展示と学部・大学院教育の連動を図る教育プログラムです。大学博物館の存在の理由の1つは、学内の教育研究の成果を社会に向けて発信することですから、学生教育との連動を考えるなどというのは、改めてご紹介するまでもないほど、大学博物館では日常的に実践されていることなのです。

大学博物館の実験展示と学部・研究系教育との連携の場は、私の場合、文学部・人文社会科学研究系の通年授業の1つである「博物館工学ゼミ」です。この授業科目は、博物館学芸員資格取得要件の1つ

に数えられる「博物館実習」科目にも読み替えられています。この授業枠を使って、私は学生たちと一緒に、展覧会を作ったり、単発的なイベント、中長期に亘るプロジェクトをおこなっているわけです。

最初にご紹介するのは、「真贋のはざま」という展覧会です。この企画は2年間に亘るゼミの成果を発表する場となりました。ゼミというのは、ふつう単年度で区切られていますが、1つの展示をおこなうということになると、この展覧会がまさにそうでしたが、1年ではとうてい収まりきれません。実際、この展覧会は都合2年度に亘り、延べにして150名の学生が参加しています。「白紙の状態」から「事業の終了」まで、というのがプログラムの全サイクルなのです。「事業の終了」というのは、展示評価報告書の最終的な刊行までという意味です。展示の詳しい中身について、ここでは触れませんが、展示において「優美なデザイン」をどのように実現したら良いか、今までにない斬新な切り口をどうやって示したら良いか、といった一般問題にはじまり、この展覧会の場合には、真と贋、本物と偽物、オリジナルとコピーをどのようなかたちで対比させたら良いか、レプリカはどのような機能を持っているか、放射性炭素年代測定技術を使ってなにを、どのように明らかにすることができるか、などの個別問題を考える。それをゼミの学生たちとともに進めるというわけです。



ご覧頂いているものは、展示図録と、そして最終的に刊行した来館者調査報告書です。展覧会の会期中、調査担当の学生たちは、会場につめて、書面アンケート調査、口答インタビュー調査、トラッキング調査をおこなっています。この最後の調査は大変です。来館された方が会場でのどのような行動をとったかを、覆面調査員として追跡するというものです。短い人で30分、長い人になると3時間も会場に滞留する場合があるからです。マスコミやメディアの反応も含め、こうした複数の調査データを複合し、一般社会はこの展覧会をどのように受け止めたのかを調査します。サンプリングから解析まで、その全プロセスだけでなく、出版物の編集やレイアウトまで含め、最終的な調査報告書刊行を調査担当班の学生たちは経験することになります。そちらにおられる湯浅先生も、この成果のとりまとめには深く関与して下さいました。

次の展覧会は「マーク・ダイオンの『驚異の部屋』」という展覧会の事例です。この展覧会は学内に放置されたままになっているモノ、廃棄されたモノなど、サイエンスの世界から追い出され、うち捨て



られた状態にあるモノを、展示を通して再生させるという試みです。学生たちはごみ捨て場、あるいは建物の地下室など、学内の各所をサーベイし、そこに置かれて捨て去られたものをポラロイドに撮り、記載をし、その記載されたものからアメリカ人現代美術家のマーク・ダイオンさんと私とで選別し、会場内の組み立てを考えるとというのが流れです。ゴミ集めというといいかげんなものに聞こえますが、かなり方法的にはきちんとしたものであって、分類学者や考古学者がフィールドで標本を採集するのと同じようなデータ化を学生にさせています。また、ゴミだからといって、ぞんざいな扱いもせず、展示品として然るべき扱いをするよう徹底しました。

この展覧会の実験性の第1は、アメリカで特段の注目を集めていたコンテンポラリー・アーティストとのコラボレーションでし

たが、第2の目論見もありました。それは、展覧会に解説文を付けないという試みです。文字による解説をいっさい展示会場に置かないとどうなるか、試してみようというわけです。文字がなくても、眼に訴えかけるだけでも、コミュニケーションができるのではないか、メッセージを伝えることができるのではないか、というわけです。

もちろん、これは実験展示です。ですから、その結果の是非を問う検証をおこなわなければなりません。実験的な試みをやり、それがどのようにメディアや一般の方に受け止められたのか、その検証を怠らないということが大切なのです。このときも2,000人近い来館者から、インタビュー、アンケートをおこないました。その結果、8割弱の人が説明文のない展示を新鮮なものと受け止めてくれたことを知りました。もちろん、ごく一部の人でしたが、学芸員が手抜きをしたのではないかとする意見もありました。このことを私は次のように受け止めています。すなわち、一般の人々の感覚からして、どこの展覧会に行っても、作品のかたわらには説明文がある、しかも通り一遍の説明があることがルーティンと化している、しかし、99館がそれをやるのなら、1館くらいそれをやらないところがあっても良いのではないか、すると、その例外的な1館は輝くのではないか、そのことを実証してみたかったのです。

会場を訪れた人は、自分の眼で面白いものを探し、自分の五官を使ってこれは何かを考える。考えを押しつけるのではなく、考える余地を与える。これは、あるコンテンツを他者に伝えるさいに、すごく重要な要素であり、高度な戦略である、と考えるわけです。考える余地を残すことの大切さを学生たちに伝えることができたのではないか、その意味で実験的な展示だったと私個人は考えています。

この展覧会での、もう1つの実験性は、既存の学問の専門分野枠を外すとどうなるか、というものです。これまでの枠組みに従うなら、たとえば、これは昆虫学であり、これは鉱物学であり、これは植物学であり、これは獣医学である、あるいは考古学である、ということになる。しかし、そうした旧来の枠組みを壊してみたらどうか。一度そうしたものを超えて、たとえば、地上に生きる生き物であるとか、空中に展開する世界であるとか、既存の知的枠組みとはまったく別な視点に立って、世界を眺め直して見るのはどうだろうか、というわけです。

われわれの思いでは、そこに新しい世界が広がるはずでしたが、マーク・ダイオンさんとの話し合いのなかから見えてきた世界は、実際のところ、ヨーロッパ中世の世界観に近いものとなってしまいました。



た。たとえば、これは動物標本であり、植物標本であり、医学標本ですが、それらを地上に生きている生命としてひと括りに扱う、というかたちで会場を構成していく。そうすると、医学標本も、人類学標本も、考古学標本も、その他のモノもすべて、人間の存在と関わりのある事象ということで一体化する。そのようにして、従来の学術の枠組みを外すという試みを、ここでは実験としておこなったのです。

ご覧のものが展示評価報告書です。このときはマスメディアの対応ぶりにも注目し、雑誌、新聞、ラジオ、テレビが、どのようなかたちで展覧会をとりあげたのか、集計を

おこないました。また、メディアに紹介されると、その日の翌日から、さらに数日間のあいだに、どのくらい来館者動向に変化が生じたかを調べました。その結果、たとえば、5大新聞のどれかひとつに記

事が掲載されると、それから数日間のうちに 300 人から 400 人の来館者増が見込まれることがわかりました。また、天気の状態も重要な変数で、それによって 1 日当たり 100 人前後のバラツキが生じることもわかりました。このように、滅多に取得できない貴重なデータが、展示評価報告の製作過程で明らかになりました。

「プロパガンダ」という展覧会もまた、実験的なものでした。押し葉標本を作るための乾燥紙として使われていた新聞紙をテーマとするものです。時代的には、明治の初めから戦前にかけて発行された新聞を取り上げたわけですが、「新聞」でなしに「新聞紙」であるというのがミソです。これは、たまたまそうしたものの一部を、大学のゴミ廃棄場で見つけたことに端を発しています。排出したのは博物館の植物部門でした。こんなものを捨てるんだったら、ぜひ私のところに下さい、と言って集め始め、いまや 2 万枚に及んでいます。それらのなかから 3 千点ほどを選んでアーカイヴ化し、高精細の画像データとして公開しています。

展示の一部をご覧ください。中央に見えているのは「時の柱」と呼ばれるものです。1 万枚の新聞紙が積み上げられて、柱をかたちづくっています。もちろん、これらは今古紙回収業者が集めるような、ただの古新聞ではありません。明治最初期から戦前にかけて、植物の採集フィールドとなった地域で、植物の乾燥紙として集められた歴史的な新聞紙だからです。地理的な広がり而言えば、北は樺太サハリン、西は満州から朝鮮半島全域、南はインドネシアまで、極東アジア全域で発行された新聞紙が積み上げられています。事前の読みでは、ガラスケースの高さの 8 割程度までゆくはずでしたが、そこまでは届きませんでした。新聞紙 1 万枚というのは、この程度のものなのです。プロジェクトに参加した学生たちのなかには、3 日間にわたってこれを積み上げる作業だけに専心した者もいました。



この実験展示は、ただ単に学生教育との連動という側面だけでなく、ある分野で廃棄されたものを他の分野で役立てるという側面をも併せもっています。すなわち、植物の分野でもはやいらなくなったものを、人文歴史系の分野の研究資料に転用する、いわば廃棄物の博物資源化という課題をはらむプロジェクトとなりました。この展覧会をおこなったあと、新聞研究の専門機関、ひと昔前であれば社会情報研究所がそうなのでしょうが、新聞資料を蓄積している機関や博物館、東京大学で言うなら明治新聞雑誌文庫、さらには国立国会図書館など、いろいろな機関から廃棄された新聞を譲って欲しいという話が持ち込まれました。私は廃棄された新聞を見つけたとき、こういう新聞が廃棄されていますが、必要ならお譲りします、と申し出ていたのです。どの機関も、その時は断ってきたわけですが。このように、社会というのは、ずいぶんとご都合主義的なものなのだ、と学生に語ったのを覚えています。

この展覧会で試みたことの 1 つに、「ケータリング・フード・アート」というコンセプトがあります。展覧会のオープニング・レセプションなどに、ケータリング・フードを注文する、というのは良くご存じかと思います。それを展覧会のテーマと連動させてみたらどうだろうか。展覧会というのは、そのトータリティが問われる、と私は考えます。ならば、展覧会の構成要素であるオープニング・レセプションの内容も問われるに違いない。時代の感受性、テーマとの連動性、さらには会場デザインとの通有性、そうしたものにまで神経を配りたいという話を学生たちとしていましたら、東京芸大から参加していた学生のなかに、フードとアートとの関わりに興味をもつ者がいた。その学生は調理師免許をもっていたから、展覧会に合わせたフードを作ってみたらどうかということになった。お皿の代わりに使った



のは、グリーンガラスの板です。2枚の板ガラスのあいだに、イタリア未来派のプロパガンダ新聞をランダムにプリントしたフィルム・シートを挟んで、それをお皿代わりに使って、食べ物を出しました。展示テーマと食べ物のプレゼンテーションを連動させるという実験をおこなったわけです。これはなかなか好評でした。とくに女性雑誌などのマスメディアの受けが良かった。フード担当の学生たちは、のちに起業し、いまではデパートの地下のお店にまで商品を提供するまでになりました。博物館工学のゼ

ミがきっかけとなって、生業を見つける人が出たことは嬉しい限りです。

「アート&サイエンス」をテーマとする展示シリーズの1つですが、「フォトアート&サイエンス」を取り上げた展覧会もあります。商業写真の第一人者とされる上田義彦さんとのコラボレーションがそれです。展覧会図録とポスターのデザインは、無印良品のデザインなどで良く知られる原研哉さんをお願いしました。「サイエンス」の世界に、コマーシャル・フォト、グラフィック・デザイン、スペース・デザインの3種を近づけてみようというわけです。私が戦略として考えたのは、展示構成をできるだけミニマルなものとするということ、すなわち、できるだけ要素を切り詰めた空間を実現したいということです。ご覧の左上が展示図録で、右側は展示入り口の写真です。実は、こうした展示会場の写真というのはかなり曲者で、この普通のレンズで撮影した写真を、次の360度パノラマ写真と見比べてみてください。標準レンズで撮った写真を基にした議論は、展示物についての話となる。ところが、このようなパノラマ写真をみると、作品論的な議論が後退し、空間のデザイン戦略が良く見えてくる。全体は白と黒を基調とする。アイキャッチとなるのは、会場内の3カ所に置かれたビロード椅子の赤いワイン色と、グリーンガラスの透過性の緑です。そうした色彩構成プログラムが、パノラマ写真から見えてくる。展示物でなしに、「空間デザイン」が見えてくる。その感覚がご理解頂けますか。こちらのほうが会場での視覚体験には近いはず。これは展示デザインを評価し、社会化するさいの視点として、もっとも注目されて然るべきものなのではないでしょうか。



「フォトアート&サイエンス」の次は「モード&サイエンス」です。「seeing」と題したこのイベントは、ほとんど学生任せの事業となりました。学生の任意団体「Fab」の活動に興味をもった私が、博物館工学ゼミとのコラボレーションを提案し、大学博物館の公式事業としてファッション・ショーをやってみないかと持ちかけたのです。昨日までミシンも使ったことのない学生たちを相手に、服を作るとはそもそもいかなることか、という話を始めてから1年間でショーの実現にまでこぎ着けました。もちろん、事は服を作ることだけに限りません。モデルも、ヘア・メイクも、音響も、演出も、大道具も、広報も、運営も、グラフィック資料作りも、レセプションも、すべてこなさなくてはなりません。人的資源はすべてヴォランティアです。たとえば、ヘア・メイクは養成専門学校のインターン生に頼む。モデルも専門学校の学生やインターン生です。服作りは、多くが私のゼミ生です。広報担当者は、事業予算を化粧品会社などにいって頭を下げて、お金を取ってくる役割もこなしました。パンフレットを作るだけでも、予算が必要になりますから、できるだけ自己努力で賄わせるという方針をとりました。ただ

し、会場構成とか、全体のコーディネートとか、総合的な判断の必要とされる事柄については私がディレクションしています。

このイベントは3回のセッションからなっており、400人を超える人がショーを見に来ました。モデル、ヘア・メイク、制作など、バックヤードで働いた学生などの参加者は150人に上りました。これは、多くの人たちが、わずか10分間のショーを演じるために動いたということです。ショーはごく短いものでしたが、得たものは少なくなかったと



思います。秋篠宮文仁殿下、同妃殿下、森英恵さんといった方々がお見えになり、デザイナー、モデルほかの参加者の一人一人に声を掛けて下さった。そうした体験が、若い学生たちにとって、どれほど強い刺激となるかということをご想像下さい。ということで、昨年の10月にタキザワナオキさんのショーをおこない、この2月にはもう一回学生主催のショーをやることになっています。

大学から一歩外に出て、社会に向かってメッセージを発信する。企業の人たちに会って、たとえば、これこれのことをやりたいから支援してもらえないか、こうしたことを教育の枠組みのなかで体験できるというのは、大学博物館ならではのことであり、それは彼ら学生たちにとって非常に重たい経験となる、そのことをつくづく感じます。

大学博物館の展覧会だけではありませんが、展覧会の実績というか、後々まで残るものの大切さについて学生たちに喋ることがあります。たとえば、真贋展をやり報告書を作り、新聞展をやり報告書を作り、ダイオン展をやり報告書を作る。展覧会をやるということは、その会場を造るだけにとどまらない。ゼロから企画を始め、いろいろな段取りを経る。予算確保などの段取りを経て、最後の報告書に至る。展覧会が閉場した、というだけでは終わらない。最後の最後に報告書を出版してはじめて、とはすなわち、展示図録と報告書が線であって初めて、サイクルを閉じるものである、という認識を学生たちに植え付けたいと考えています。

そのプロセスの各段階に、各自の活動域を確保してあげることが大切です。たとえば、出版社志望の学生に対しては、図録の編集の仕事に携わらせる。研究者志望の学生に対しては、作品や資料の調査をおこなわせ、解説文を書かせる。広報関係仕事を志す学生に対しては、展覧会のPRの仕事任せ。デザインやグラフィックの道に関心のある学生に対しては、会場のデザイン構成や設営の手伝いをさせる。学生たちを1つのカリキュラムで縛るのではなくて、彼らがおぼろげながら将来の進路と考えているものに近い仕事を揃えてあげること。そうした面で、私のゼミは内容面で特段にヴァリエティに富んでいると言えるのかもしれません。

さて、これまで展覧会と教育研究の連動について話をしてきましたが、これから第2の事例に移ります。これは2006年に始まったモバイル・プロジェクトで、社会での現場体験を伴う教育プログラムです。このプロジェクトの発想の原点は、モンゴル遊牧民のパオとかゲルとか呼ばれる住居形式にあります。遊牧民は移動住居のなかに「世界」をもっていて、それを抱えて大地の上を移動しています。モバイル・ミュージアムのユニットすなわち、モバイル・ユニットは遊牧民の生活形態に学んだものです。

これをミュージアム事業に適用できないか、というわけです。モバイル・ユニットをコンテナのようなものに搭載し、あちこち移動して回る。そういうミュージアム・プロジェクトです。ご覧のものは、都市空間を遊動するモバイル・ユニットの仮想図です。大都市の地下街のコンコースに、このようなモバイル・ユニットが並んだらどうだろうか。あるいは、オフィス・ビルのロビーのようなところはどうか。こうしたものを、たとえば、6カ月単位で交換しつつ維持していくミュージアム。都市空間のなかでTPOに合わせてながら、ミュージアムを自由に變形しながら展開させてみたらどうだろうか。

ご覧のものは、モバイル・ミュージアムの第1号の実現例です。オフィス・ビルのロビーに、普段ではあまり見かけない学術標本を持ち込んでみせる。サイエンスの面白さとか、あるいは自然造形の面白さ、あるいは学術標本の面白さを伝えるための道具に使ってみたというわけです。これは控え目なもの



ですが、モバイル・ミュージアムのロゴです。この設置と運営を、社会のなかで実際にやるのが私のゼミ生たちです。ここでも、学生たちの関与は、展示の準備をするだけに止まりません。学生たちは、実際の現場に通い、社会の一般の人たちが、このような展示、このようなプロジェクトをどのように受け止めているかモニタリングしています。現在、3年目の後期に入っています。ということで5回の展示更新を経験しています。リニューアル直後の1週間がサンプリングの機会になります。その成果は、最終更新が終わった3年後に纏められることとなります。モバイル・ミュージアムを社会がどのように受け止めたのか受け止めなかったのか、あるいは、こうしたプロジェクトに意義があるのかないのか、その結果を3年度末に出そうというわけです。

これは企業の役員室でのモバイル展示です。動物標本が企業のオフィスに飾られる。それを見て一般の人たちは、普段見慣れないものが置かれていることに気づく。当然、話題はそこに向かう。それで会話が弾み、うちとけたところでビジネスの話となる。そのことが企業の営業活動にとってどれだけのメリットとなるか、調査の結果分かってきた。そういう現場を学生たちが踏んでいるということです。

本日ご紹介する第3の事例ですが、初等中等教育への貢献というのを念頭に置いた、複合教育プログラムの実践というのがそれです。従来は、ミュージアムが学生を受け入れるにはどうしたら良いか、という視点での発想が大勢を占めていたように思います。しかし、多くの資料を抱えているミュージアム、たとえば、東大総合研究博物館のように、廊下にも標本の置場がないミュージアムの場合には、発想を逆転して、どのようにしたらミュージアムは学校教育施設のなかに入っていけるか、そう考える必要があります。

実際、現在の学校教育施設は、学童数が激減し、教室の過剰現象に悩んでいます。そうした初等中等教育の施設に、大学の学術標本コレクションを持ち込めないだろうかと考えたわけです。

冒頭にミュージアム・テクノロジーは、学術研究とデザインの統合を目指すという話をしました。その試みのひとつとして始めたのが「M3」プロジェクトです。これは「モバイル・ミュージアム」に、「モジュール・ユニット・ミュージアム」と「ミドルヤード」の二つを加え、それら3つの頭文字「M」をとったものです。モバイル・ミュージアムの基本コンセプトは、ある会場から次の会場に、1つの完成された展示コンテンツを次々に移動させ動かしていく。ご覧のようなかたちで、入れ替えゲームをおこなうというものです。これはコストの削減という、ミュージアムにとって非常に重要な問題を解決する方法の1つです。もちろん、省エネにもつながりますし、展示の陳腐化をさける方法でもあります。要は、システム化の発想です。

また、時と場所を選ばない、一定の形態に縛られないという長所もあります。TPOに応じて、いろいろ可変的であるからです。モバイル・ミュージアムをさらに小単元化すると、モジュール・ユニット・ミュージアムになります。小さなモジュール・ユニットで取り替えゲームをおこなうことで、つねに違った内容のものを公衆に向けて提示することができるわけです。現在、総合研究博物館でおこなっている「ミュージアム・アラカルト」展はまさに、モジュール・ユニットの組み合わせからなっています。ですから、私たちの博物館では、常設展のようなものは、コストも時間も少なく済みます。これは大学博物館が、限られた予算枠のなかで生き延びていくための1つの方策であると私は考えています。

次はミドルヤードです。従来の区分では、フロントヤードとバックヤードの2つの概念しかありませんでした。しかし、その中間にミドルヤードという概念を加えてみたらどうだろうか、というわけです。ミドルヤードはラボ機能、ワークショップ機能をもったスペースで、これをどう生かすかという試みです。

私たちは、「M3」プロジェクトを学外の施設、とくに海外で試んでいます。1つは中国北京の清華大学でのプロジェクト。2つ目は、モンゴルのウランバートルの国立自然誌博物館でのそれ。3つ目はエチオピアのアディスアベバ国立自然誌博物館。4つ目はシリアのダマスカス国立博物館。5つ目はモロッコのマラケシュの国立博物館でのモバイル・ミュージアムです。海外の学術研究機関に中期もしくは長期に亘ってコンテンツを貸し出すというプロジェクトは、まさにモバイル・ミュージアムの海外版と言って良いと思います。

社会教育プログラムという、学校教育との関わりという問題に話を戻します。ご覧のものは、長野市の地質館のリニューアル事業です。2003年に始めて5年をかけて、昨年の7月晴れて落成を迎えることができました。長野県の戸隠村が長野市に合併され、柵小学校という学校の校舎が廃校になるというので、それをミュージアム施設に変えることはできないだろうか、というわけです。



学校教育施設ですから、教室的な要素を残したまま、そこをミュージアム化するというのが、私たちに与えられた課題でした。大学博物館が初等中等教育に貢献する、その1つの方策を示したいと思い、試みたわけです。変哲ない学校の教室が、ご覧の通り、ミュージアムに生まれ変わる。戸隠は不便な場所にあります、いまや地域一円のホットスポットになっているそうです。地元の人たち、あるいは学芸員の方々が頑張っていると聞かされ、たいへん嬉しく思っています。



ご覧のものは、現在、博物館の本館でおこなわれている展示です。展覧会のための予算がない。ということで、学生の手足を活用しようというわけです。ゼミの学生たちに、世界の有名建築のマケットを作らせ、それを展示するというのがコンセプトです。半年近くの準備をしましたが、当初できていたのは100台にも満たないものでした。しかし、展覧会をオープンし、会期中にも展示の会場に作業台を用意し、そこで制作作業を続けることにしました。今

も続いており、この予定でいくと会期終了時点には150台ぐらいにはなりそうです。これは、展示をおこないつつ、コレクションの充実を図るという試みなのです。

学生たちが作業しているところに、土日を利用して、一般客が来る。子供たちにもマケット作りを一緒にやらせる。もちろん、子供の作ったマケットを展示物とするというわけではないのですが、一緒に作ろう、という呼びかけは効果的です。ご覧のように、学生たちと子どもたちが一緒に作業をしています。これを、私は複合教育プログラムと呼ぶわけです。なぜかと言うと、教える側と教わる側が柔軟に入れ替えゲームをやることになるからです。子供に教えることで、学生は子供から学ぶことがある。学校の先生に大学の大学院生が専門知識を伝える。すると、学校の先生方が、そんな言い方じゃ分からないでしょう、もっと簡単に言わないと、と応える。すると、大学院生は自分の使った専門用語がいかに

特殊なものであるかを悟られる。そうしたかたちで、教える側と教わる側とがつねに、役割の入れ替えゲームを演ずることになる。それこそ、私が複合教育という言葉を使う所以なのです。ミュージアムという場では、それを実現できるのではないかというわけです。

最後の事例ですが、つい昨年の10月から11月にかけて、銀座のエルメス・ジャポンでおこなったモバイル・ミュージアムです。自然誌の学者の小部屋を商店舗のなかに実現してみせる。こうした場合には、会場のセットアップは、店舗の活動が終わってからになります。夕方の9時頃から翌朝までのあ



いだに展示設営をする、そうした経験を体験することになります。撤収も同様です。一晩のうちに元通りに復元する。そういうことを学生は体験するわけです。

私が作業する回りには、つねに学生たちがいます。現場を見ているわけです。その見るということは、学生になにか伝えることになるのではないかと私は考えます。ですから、私は教育者らしいことをやっているわけではありません。しかし、学生たちが実際に社会に出て遭遇することというのは、多かれ

少なかれそういうものなのではないか。学校教育とのかかわりで言えば、そういうことを、教育プログラムの枠内で体験させられるのは、研究科や学部でなく、大学博物館以外あり得ないのではないかと、そのように私は考える次第です。

私の話は以上です。長時間になりましたが、これで終わりにさせていただきます。

(高橋) 西野先生ありがとうございました。実験的な展示、実験的な展示博物館と標榜されるだけあって、なかなか刺激的な話が非常に多かったのですが、会場からどうでしょうか、何か質問で、あそこところはどうかだったのかとか、実際のところはなど何でもいいのですが、もしございましたら手を挙げて。

(参加者A) 先生の場合はこういうのをできるからいいのですね。私がこれをやろうとしたら、お前、何をやっているの、そういうふうな。話しが飛躍し過ぎたのかもしれないですけども、今、自信が付きしました。私は曲げないでやっていきます。私は町内会ではごみを集めるいろいろなことをやっていすけれども、いいものがあるのですね。多少処分に困っていますので、何かに利用できないかなと思っていますので自信が付きしました。今日は本当に来てよかったです。ちょっと次元が違いますので、すみません。

(高橋) いえいえ。恐らく博物館関係の人もここで聞いておられるかもしれませんが、似たような感想もあるのではないかと思いますのですね。やっぱり東大だからできるのではないかと思います部分もあり得ると思いますね。例えば企業に持っていったり何かをしても、それがどこかの例えば小さな博物館が飛び込みで行ったとしても、それは面白そうだけれども、話はまた次という形で断られるかもしれませんね。そこは東大の場合も当然のことながら積み重ねもあって、それなりの評価を受けているということもあって、どんどんどんどん実験的展示が繰り返されているのだと思いますので、なかなかやっぱりここまでくるのは、話は面白そうには聞きましたが、実際には相当大変だなというような。

(参加者A) ……ないし、お前何を考えているのだということで、そういうのですね。

(高橋) ありがとうございます。ほかにどうでしょうか、だいたいよろしいでしょうか。私の方からちょっと今の方の質問と似たようなところもあるのですが、ない者のひがみ的なところもあるのですが、

こうやって実験展示をやられて、最後の検証がやはり大事であるということをおっしゃられて、確かにそうだなと思ったのですが、具体的な検証としてはどういうことが項目になるのか。例えばそれを見に来られた人数とか、あるいは衝撃を受けた程度とか、何かそういう計量的な、例えば数字に置き替えて、この辺までいけば例えば成功とか、この辺までいけばだめとか、何かそういう検証における工夫みたいな、あるいは、ほかではやらない検証の手法と言うのでしょうか。何かその辺がもしあればちょっとお聞かせ願えればなど思ったのですが、いかがでしょうか、検証というのは。

(西野) 数字というのは、しょせん数字です。されど数字、という側面もあります。ですから、基本的なデータを把握しておくことは、将来のためにも、大切なことと思います。たとえば、この展覧会であれば、この程度の人が入るのではないか。その下読みに対して、現実はどう答えたか。その違いを解析するというのは、すごく重要なことだと思います。なぜか。たしかに、非常に専門的で、ある意味で、難しい展覧会もある。また、エンターテインメント性の強いものもある。そうした多様性を認めた上で、読みが外れるというのは、プロとして失格だとも言えます。先ほど申し上げたように、人の体験というものの中には、質的な面もすごくある。あるモノを見た瞬間、その人の人生航路が決まってしまった、というケースもあり得なくはない。これは体験の時間的な長さの問題ではありません。

この点では、そちらに座っておられる湯浅先生が、体験の積み重ねが、どのようにその人の人格形成に影響を与えたかという、長期に亘る研究を続けておられます。そうした研究を、今後も続けていく必要があるように思います。

来館者評価については、細かな数値の扱い方についての蓄積を、私たちはもっています。ただ、それは専門的で、ややこしい話ですから、簡単な言葉では申し上げ難いのです。もちろん、ただ単に展覧会の成否を来館者数で計るなどということはやっていません。あとは、企業秘密です(笑)。実は新しい評価手法を研究中でありまして、近いうちにそれを公表できるかと思っています。

(高橋) はい。ありがとうございました。

大学博物館で体験型全人教育

大野 照文

このたびは、北海道大学総合博物館の教育 GP シンポジウムにお招きいただき、講演させていただく機会を与えていただきありがとうございます。さて、今回のシンポジウムで、「全人教育」というキーワードが入っていることを知ったとき、実は私は申し訳ないですが少し違和感を持ちました。全人教育をやるなら、教養部を残しておけばよかっただけの話かもしれないと思います。

さて、なぜ大学で全人教育かと問いますと、それを必要とする重大な問題が潜んでいます。私どもの博物館は常設展示の中に、天才チンパンジー、アイちゃんを京都大学が育てていまして、そのアイちゃんの知能検査をするゲームがございます。タッチパネルに映された文字や色を瞬時に判断して、正しい順番で押していきますと正解となります。チンパンジーの場合には、それでピーナッツが出ておなか膨れる。それとまったく同じことを実は、センター入試はやっています。瞬発力がじっくりと考える力より重んじられているようです。

日本人は非常に良い国民で、西洋では人間中心というのか、人間が一番高いところにいる。ところが、日本人には非常に謙譲の美德がございますから、なんと日本人はチンパンジーを私たちの知恵の理想として、初等、中等教育においてはチンパンジーになりなさい。それとまったく同じ能力をつけた人が大学に入ってこられるわけです。ということは、私たちはチンパンジーの知恵を手にして大学に入るわけですから、今度はホモサピエンスという種に特有の人間性を大学で取り戻してはいかがでしょうかということになります。

おそらく、大学で教育に携わっておられる先生方は、この問題に今、非常に直面されて、どのようにしていこうかと悩んでおられると思うのです。私は、この数年、初等・中等教育の現場に入って、いろいろなことをしてまいりました。北大でお考えになっておられる GP の狙いは、私なりに整理しますと、課題探求能力、問題解決能力、コミュニケーション能力、それから協調性、自主性をはぐくむ等々、そういう能力を身につけてもらって、広い視野と社会貢献、ボランティア精神等々、意識の高い学生さんを育成しましょうということです。その手法については導入コース、ステップアップコース、アドバンスコースが想定されているようです。具体的な取り組みをされるにあたって、生涯学習プログラム開発その他の私の経験が少し参考にしていただけるのではないのでしょうか。

私たちが京大の総合博物館で開発した生涯学習プログラムでは、モノ、つまり対象をじっくり見て、そこから問題を発見して、そしてそれを推理したり討論したりして、確かめて解決しましょうということを 90 分間の学習教室でお伝えします。そういうことをやっていきますと、うまくできた場合、対象に対して感情移入が起きます。それが生き物である場合には、その生き物の存在の意義を非常に高く評価して、他者を肯定することが起きます。また、そのような精神活動をしている自分を発見して、自己肯定の深い感動を生み出すこともまれに起きます。

そういうことを何とか呼び起こしながら、つまり子供たちに勉強というよりも、世の中、自分たちの身の回りにいっぱい不思議で楽しいことがあって、それを一生懸命、勉強していきましょうよという、動機付けのようなことのできる教材をいくつか開発しているわけです。それはたぶん、素材というところで少し参考になるのではないかと。つまり、教育にはふさわしい教材が必要で、教育には手法が必要です。ふさわしい教材の開発には、いろいろと試行錯誤してきました。そこで、京都大学における生涯学習関連教材開発の紹介をさせていただきます。

まず、具体的なねらいにそったシナリオが必要です。私どもは 90 分コースを想定していますから、

この時間、参加者が集中し続けられるレベルのシナリオです。そのシナリオを補完するための必要十分な補助教材も開発します。用意を周到にして参加者大満足というプログラムの開発が目標です。こんなことを始めました動機といいますと、それには理由があります。我々は、大学博物館に課せられた標本の収集・管理、研究教育への活用、成果の情報発信というミッションを誠心誠意、全霊を尽くしてやっています。けれども、勝手にモノをやたらめったら集めて、内輪向けのお遊びをしているのではないかという疑問を呈される方々もあちこちにおられます。ですから、私たちはそうじゃないよと、モノを中心とした、モノに根ざした生涯学習を通じて、博物館の活動、つまりモノを収集・保管し、研究・教育等へ活用し、またその成果を情報発信するという活動の重要性をご理解いただこうと努力しているのです。このような努力のひとつが生涯学習プログラムの開発です。

生涯学習に飛び付いたのは非常に簡単です。生涯学習というのは、要するにまずモノを見て推理し、みんなで話し合っ、そして確かめながら、徐々に面白いことを調べていきましょうということです（図1）。観察、推理、話し合い、確かめというのを難しく言えば、観察、仮説の提唱、ディベート、そして仮説のペリフィケーションないしは棄却ということになります。つまり科学の方法とまったく同じです。ですから、普段の私たちが使っている方法論をそのまま生涯学習教材開発のバックボーンとして生かせるのです。大学と学校現場の連携が要求される昨今、このような教材を大学で作るにあたって、素材となるモノを無尽蔵に持っている博物館があることは、大きなメリットです。

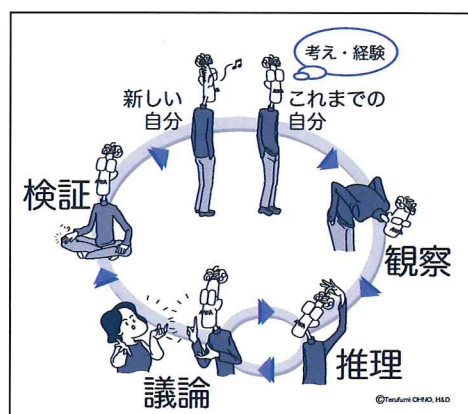


図1

いくつか開発をしまいいりました。今日はその中で「三葉虫を調べよう」という子供さん向けの教材のお話をします。それから、子供さん向けから派生しまして、二枚貝を使った大人の二枚貝という「貝体新書」、貝の体の新書というプロジェクト。それから、そこからさらに派生しまして視覚障害者の方向けの教材「サワツテミルカイ」という教材、この3つのお話を中心に話をしていきましょう。

繰り返しになりますが、「三葉虫を調べよう」もすべてそうなのですけれども、私たちが開発しています教材プログラムのねらいは、観察をしましょう、推理をしましょう、話し合いましょう、そして確かめましょうという非常にベーシックな理科の基本を何度も何度も繰り返すことによって、だんだん力を付けていきましょうというものです。今まで持っていた知識、経験を自分の力で広げてゆく楽しさを体験すれば、それが原動力となって、さらに自分を高めたり深めたりすることができるようになるだろうということです。

西野先生のところほどの方法論は持たないのですけれども、一つのプログラムについて何度も試行教室を開催、評価・改善作業をつうじて開発してゆきます。評価は、博物館を舞台にした生涯学習をリードする女性中心の専門家グループにお願いしています。

子供さん相手に「知っているか？」なんて聞いたら、大学の先生が聞くような質問だから、よほど難しい質問だと思って硬直してしまいます。そうじゃなくて「一緒に調べましょう」と言いましょうなどという、参加者と講師の距離の取り方まで評価されます。それから今日の会場もそうなのですけれども、子供たち向けの行事のときにこういう配線をしておくと、子供がけつまずくかもしれません。それでせっかくの映像が途中でぷつんと途切れたら、あなたの時間もお客さんの時間をもったいないじゃないですかという、会場設営も含めた評価までもがされていくわけです。日本の場合は、こういう評価は、私が知る限りあまり男性がやってくれない。日本で、あるいは海外でしっかりとしたこういう分野での

研鑽を積んでおられるかたが女性にはたくさんおられ、こういう人たちとチームワークを組んで開発してゆきます。この人達が出してくださる改善勧告というのがありまして、それに対して真剣に対応策を考えてゆきます。

その結果、プログラムが徐々に改善されてゆきます。完成したプログラムを使って2つの異質な集団を対象に行った学習教室のアンケートを示しましょう。一つは岐阜大学での学習教室。参加者は三葉虫に興味をもった子どもで、三葉虫という名前を聞いたことがあるかといったら、最初に70%ぐらいの子供たちが「はい」と答える。一方、ごく一般的な学校のクラスで行った学習教室では、同じ問いに70%が「いいえ」と答えています。この二つの集団、出発点における興味の度合いは全く違うのです。

途中を省きますけれども、学習教室が終わってからプログラムが面白いと感じたかを聞くと、岐阜大学での学習教室でも、一般的な学校での学習教室でも8割近くが楽しかったと答えます。さらに、どこが楽しかったですかという質問をしますと、観察や討論、自分の推理通りの化石があることを確かめられたことなど、我々がプログラムに盛り込んだ意図に近いところで楽しんでくれたことがわかります。評価作業を導入することによって、私たちの開発意図に近い教材ができたと考えています。

「三葉虫を調べよう」の学習教室での質問の一つは、三葉虫の目にはどんな特徴があるかなというものなのです。三葉虫は、子どもたちの大好きな昆虫に近い仲間ですから、そこから推理してすぐ「複眼」という答えがでできます。これは正解なのですが、わざと正解だとはいわずに、なぜそう考えたのかを問いかけます。すると、子供たちはお互い相談や議論を始めます。「三葉虫は水の中に住んでいるから空を飛ぶトンボとは違う」という子供がいたり、それに反論して「いや、トンボの幼虫のヤゴは水の中にいるから、三葉虫も複眼でいいんじゃない」などと議論が白熱しはじめます。

ここが大事なところですよ。理論物理学というのがあります。理論物理学で、理にかなった複数の可能性が出たとき、最後は何で検証するかというと、実験です。子ども達の議論も、理論物理学の論争と同じです。そして、実験のかわりに化石を見ることで検証することができます。こういう手順を踏んだうえで、実物を見て確かめることは、初めから三葉虫は複眼ですよと見せるのとは全然違う学習・教育効果があると思います。

こういうたぐいの問いを何度も繰り返します。学習教室の始まって間もなくの質問の答えが「複眼」と述べた子どもさん、まだ恥ずかしそうにしています。コースがだんだんと進んで、例えば「三葉虫は天敵からどのようにして身を守るんでしょうか」という質問が出る頃には、子供たちも一生懸命手を挙げて、ああでもない、こうでもない、いろいろな仮説を出して学習教室に活気が生まれます。

写真の子ども達は、「ダンゴムシのように身を丸く丸めて、おなかの柔らかいところを隠して身を守る」という推理をしました。そして、化石をみて推理の正しかったことを確かめているところです。自分たちの推理が当たったことを誇らしげに仲間に伝えています（図2）。ここまでは我々が予測した反応だったのですが、その後、この子ども達は、化石をまじまじと見始めています。何億年も前に絶滅し



図 2



図 3

た化石の生きていた頃のことを推理して、それを見事に確かめることのできる自分を発見して、恍惚の表情になっているのです（図3）。「私はこんなことができる人なんだ」という、自己肯定の念が子ども達の心の中に芽生える瞬間です。

そうすると、後は收拾がつきません。子供は全部前に出てきて、勝手にしゃべるようなこともしばしば起きます。おじさんは、こうやって標本を持っていますが、指し棒を持って解説しているのは子供です。

大人向けの教材も作りました。これは4年以上にわたって毎週末に続けている子供博物館というプログラムの写真です。京都大学を中心とした、大学院生・大学生の人たち、OB、近所の高校の理科クラブの生徒、あるいは主婦の人たちが入り乱れて、理系も文系も織り交ぜてその楽しさを伝える行事です。こういうところには、多くの場合おじいちゃんやおばあちゃん、お父さんやお母さんがついてきて、子供を押しつけてでも楽しんで帰られることがしばしばあります。それなら大人の人向けのプログラムも作りましょうと。それで作りました。それは「貝体新書」というものです。

大人や熟年になりますと、人生においてたくさんの体験をされている。特に女性はそうです。ハマグリを調理するときに水がびゅっと飛び出したとか、舌のようなものが出ていた。それから、少し趣味の広い方であれば、貝合わせというゲームがあるとか、そういう二枚貝についての非常に多くの経験をすでにお持ちです。そこで、参加者同士でこれらの経験を全部吐き出してもらって、その経験をもとに、推理、議論、ディベートをしながら、二枚貝が私たちと同じ動物であることを実感しましょうということをおねらいに学習プログラムを開発しました。

そんなものは誰も知っている。八百屋で売ってなくて魚屋で売っているものだから、きっと動物に違いない。二枚貝は初めから動物なのです。だけれども、皆さんが普段、口にされるあの肉が、呼吸し、動き、食事し、うんちもする動物の体だということを理解できているでしょうか。そういう理解と一緒に、そして実感的にしましょうという学習プログラムです。

例えば貝殻をお見せして、殻の役目は何ですかと質問をしたりしながら、個々人の体験、知識を、コミュニケーションしながら共有していきます。うまく教室を進めていきますと、二枚貝の殻や体は動物として生きてゆくのに都合良く、非常に精巧につくられていることが分かってきます。

ここで、問題なのは正解という概念をどう考えるかということです。例えば、このおじさんは、2つの筒があって、一方から水を入れて、途中に網のようなものがある、そこにえさが引っ掛かって、それから反対側の筒からごみとかうんちとか、それから酸素を取った後の二酸化炭素がたくさん入った水を捨てるのだらうという自らの推定を、概念図を描いて説明してくれているわけです。これは実際の形態とは違いますが、原理は合っているので正解とします。すると、自然界のことを、理屈で考え、頭で考え、推理できる能力が自らに備わっていることがわかり、じゃあ、知らないものがあつたときに、自分で推理して確かめてやろうじゃないかという、世界を探究するのに非常に積極的な、能動的な態度になられる方が多い。それから、みんなで話をしてみ、常にそういうことではないのですけれども、いいディスカッションになっていきますと、講師は黒子になって、参加者が主体で教室が進んでゆき、自己達成感が生まれます。

学習教室が終わった後、「二枚貝でも実はすごい生き物、生命のシステムを身に付けているんだね」ということをアンケートに書いて下さるかたもおられます。二枚貝を通して他者の存在を肯定する行為がここで始まるのです。さらに、「主婦の観察力も捨てたものじゃないわね」とおっしゃって帰る方がおられます。自己肯定という結果になります。大事なことです。全人教育ですから他者を認める、それから自分自身も認める、そして学習教室でのコミュニケーションを通して、人との協調性も涵養することができるように思います。

実はそれぞれの学習プログラムを作るのにずいぶん時間をかけています。三葉虫の教材はビギナー

ブラック、1年間で作れました。大人の二枚貝は2年かかりました。その前に子ども向けの二枚貝の学習プログラムを作ったのですが、子ども向けのプログラムはどうしてもじっくりいかずに、「貝体新書」のプログラムのノウハウを借りてようやく満足のゆくシナリオが完成しました。これで「三葉虫を調べよう」から数えて4年です。

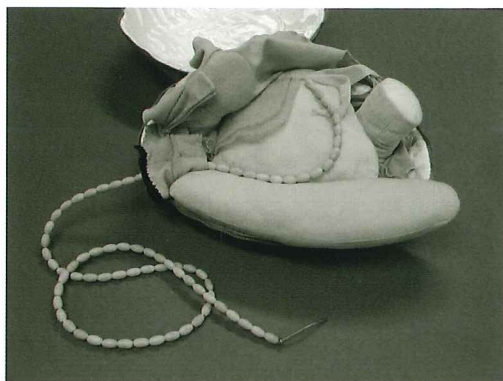


図4

その後、二枚貝を題材にして視覚障害の人たち向けの教材を2年かけて作りました。最大の問題は教材の開発です。視覚を頼りにできません。また、生きた二枚貝は、そのまま触ってもらうにはちょっと小さ過ぎます。それで、拡大模型を作りました。だいたい肩幅ぐらいの大きさのものなのですが、貝柱、足、それからえら、その他、作り込みまして、口があって肛門があるのですが、柔らかい数珠でつないだものを口から入れてやると肛門まで出てくることがわかるように、消化管も作り込みました(図4)。

消化管に使ったのは、電気掃除機の管のように少し輪っかが付いていて、当てていくとコトコトコトと音がしますので、手を当てて、もう1個の手で棒を入れていくと、今どここの位置にあるか、振動でわかるという工夫もしています。

プログラムの時間配分で重要なことは、触察(触って観察)では目での観察より時間がかかりますので、じっくり触ってもらう時間をきちんと取る必要があります。また、アイコンタクトで分かったね、分かっていないねということを伝えることもできません。貝の上下左右も、隣の参加者のものと自分のものが同じかを確かめることもできません。そこで、模型の向きをまずそろえるところから始め、それから部位の名称をきちんと伝え、必ず言葉に全部置き換えて伝えてゆく必要があります。消化管の位置を振動で伝えるという教材模型開発の工夫も必要です。

こうして、いろいろ工夫をこらしてプログラムを作るのですが、私たちが一方的に何か、目が見えない方にしてあげるということではなくて、実はこういうことをやっていきますと、私たちにとって非常に重要な、彼らが持っている、見えないけれども触って分かるということに強さをだんだん教えてもらうようになっていく。

たとえば、先ほどの模型を作ったのに協力をしてくれた西谷克司さんは工業デザイナーで、普段は電車のデザインをしています。試行的な学習教室に何度も足を運んでくれて、ユーザーとなる視覚障害者の人たちが模型のプロトタイプを触るのをしっかりと観察して、改良してくれました。この西谷さんが、「触る人たちは情報を吟味する真剣さが違うのだと気付かされた。センサー、指先や耳などの感度も大事ですが、重要なのはそれ以上に、むしろ得た情報をどれだけ大切に扱うか、つまり情報処理に臨む姿勢であろうということです」と述べています。

国立の民族学博物館が大阪にありますが、そこに全盲の民俗学の研究者広瀬浩二郎氏がいます。40歳そこそこで、さまざまな活動をしています。彼にも手伝ってもらって、2年間、一緒にこういうものを作り込んできたのですが、彼が我々に伝えてくれたことの一つは、触るということ、触察の特徴は、手と頭を縦横に動かして、点を線、面、立体と広げていく想像力にありますよと。じっくり考え、少ない材料から新しい世界をつくり出すクリエイティビティーにありますよと。ですから、我々、見て分かる健常者たちに考える楽しさを教えることができるのが、触ることを常とする者たちの強みなのだというのを、身をもって教えてくれました。

私たちと視覚を使えない人との間で、お互いに伝え合うこと、学び合うことはたくさんあるようです。

とりわけ、物の認識について、我々は見えているばかりに、できていないものもたくさんあるのかもしれないということは重要です。

さて、結局のところ、こういう学習を通じてモノをしっかり観察したり、経験を使ったり、そして推理して討論して確かめるということで、生涯学習というのは、世界と自分について知る豊かな行為である。細かいことは別として、これはまさに全人教育と同じことを言っているのだと思ったわけです。

実は全人教育というのは、小学校、中学、高校の指導要領を見ると、全部書いてくれています。学習指導要領の重点は生きる力の育成です。生きる力とは何かというと、探求能力、問題解決能力、それから豊かな人間、自主性、自己評価、コミュニケーション能力。北大の全人教育と比べると、健康でたくましいということがプラスされてはいますが、同じことが書かれています。大学では健康でたくましくなくても全人教育はなりたつのかもしません。

全人教育にはいろいろなことが入っていますが、どうきれい事を言っても自己肯定、つまり自分を好きにならないと、他の要素を全て体得しても結局はつまらない。じゃあ、今、自分が一番好きになれそうもない人たちを、全人教育の手法で救ってあげたいと思って探したら、こういう人たちがたくさん見つかりました。失礼な言い方で申し訳ないのですが、学校の先生です。極めて重要なことをされているにもかかわらず、世間は冷たい。それどころか、信用せず10年ごとに講習を受けてもらって、だめなら教員免許証は更新しない制度までつくられてしまいました。

この制度を逆手に取りまして、先生方に、あなたたちは大学を出るときはボルシェのように素晴らしかったんじゃないかと。でも10年間走り続ければ、どこか傷んだ部品もあるでしょう、その部品を取り換えてリフレッシュして帰ってくださいという講習をしました。

どうしたことをやったかという、大学では学んでいないのに就職すると理科を教えさせられるお立場の小学校の先生がたに焦点を絞りまして、苦手意識をお持ちの先生を対象に、「理科大好きな先生に変身する3日間」というタイトルで3日間・18時間の集中講習を開催しました。私たちの考えによると、理科は「五感でかんじ、かんがえ、つたえあい（はなす・きく）、そしてたしかめる」というプロセスを通じて身のまわりの世界を知る喜びを得る学習です。大学で理科関連の教科をあまり履修されておられず、理科を食わず嫌いになっておられるような小学校の先生もこのプロセスの1つ1つの要素を体験して、理科好きで理科を教えることの好きな先生になっていただくお手伝いをするのが本講習の目標でした。

理科を苦手な先生でも、アートがお好きな先生は多いはず。そこで、身の回りのものを「美しい」と思う心に、不思議と思う気持ちを付け加えていただき、その不思議を「推理」することの楽しさを知ってもらえれば、理科の苦手意識が克服できるはずだと考え、京都造形芸術大学の先生と京都大学の先生方が全面的に協力、アートと理科のコラボで取り組みました。全部で5回やりました。そのうちの1回のことを少し話しましょう。

1日目の最初の講師は子供たちとアートをして楽しむことをされている造形芸術大学の水野哲雄先生。新聞をくしゃくしゃに丸めてその感触を楽しんだり、それからこれは針金で人形を作って立たせるのです（図5）。重力でひっくり返らないようにバランスをうまく取らないといけません。物理学の要素がさりげなく盛り込まれています。さて、芸術と理科が関連しているのかなと思い始めた頃に、福のり子先生の出番。何をするかといいますと、いろいろなアート作品をみんなで鑑賞して意見を述べ合うのです。例えば、有名な徳川家康が人生で一度だけ

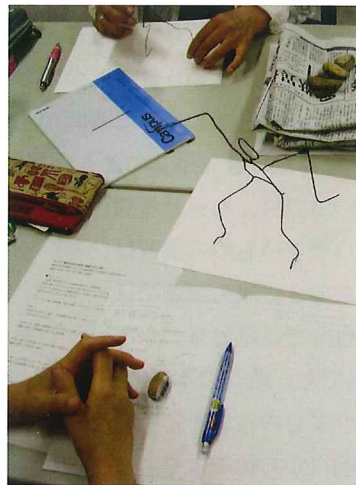


図5

合戦に負けたことがあります。逃げるときに脱糞した。あまりにも恥ずかしいので、どうしたかという
と、そのときの恥ずかしい姿を絵師に描かせる。一生それを持って自分を奮い立たせていたというもの
です。

その由来を伝えないで、この絵を見せて皆さんとディスカッションする。自由に感想を述べてもら
うと、「立派な装束を着けている武士が、どうしてあんな歯痛のような、非常にしけた顔をしているの
か」と言う人がいます。「それは絵師が練習のために描いた」と推理する人が出ます。「だけど、こんな
立派なものを練習で描いたら飯の食い上げにならない？」と、さまざまな意見が出てきて、最後に先ほ



図 6

どの由来をお伝えすると、そのディスカッションが生
きたものになってまいります。丁度「三葉虫を調べよ
う」の学習教室で、いろいろディベートした後で複眼
をもった化石を見るのと同じ効果があります。

2 日目は、三葉虫を調べよう等々の理科の学習に
入っていきます。この写真(図 6)の左の先生は何を
びっくりしているかということを少し説明しましょ
う。「三葉虫はどのようにして天敵から身を守って
いるか？」という質問に、彼女は、「砂の中に潜って身
を隠して、しかもでんでん虫のように角を伸ばして、

その上に目を付けている、そんなやつがいるはずだ！」と推理してくれました。ところが、他の参加者
は、そんな荒唐無稽な推理は無いと反発したわけです。ところが、化石を調べるとそんなやり方で身を
守っているらしい三葉虫がいたわけです。そこで、「えーっ、私、推理してしまった！」自分の推理力
のすばらしさにびっくりし、感動しているのがこの写真です。

そういうことを学んだあとで、20 名を 10 名ずつの 2 つのチームに分けて、今度は模擬授業を作っ
てもらい、お互いに生徒役と先生役に分かれて実施してもらいます。教案づくりに熱がはいってくると、
喧喧譁譁。ベテランの女性の先生がでんと席に座って持論を展開、意見が合わない男の先生方が、理屈
では負けるので立ち上がって威嚇しながら討論するなどという、けんか腰での議論まではじめます。で
もここまで真剣に作り上げた教案ですから、これが実際に模擬授業になると、非常に皆さん生き生きと
お教えになるし、生徒役の先生方も楽しめます。

我々の意図がどの程度実現したのか自己採点することは難しいことです。そこで、いただいた感想
の 1 つを紹介しておきます。

3 日間本当にありがとうございました！

免許の更新ということについては、正直なところ

そんなことをしている時間がもったいないと今も思っているのですが

「理科大好き先生」のような講習なら

いつでも もっと受講したいと思います。

ハウツーものの講習はいろいろありますが

この 3 日間の講習では

自分では絶対気づかなかった視点から

(でも、教育の本質にかかわる深いところで)

今までの自分を振り返ることができました。

明日から何をよりどころに教育に取り組んでいけばよいかを示してくださり

今までにも増して理科も教師の仕事も好きになりました。

ありがとうございました！！

て、その趣旨を皆さんに共有していただいて、さらに発展させていただければと思います。

こんなところではないでしょうかということで、終わらせていただきます。ありがとうございました。

（高橋） どうもありがとうございました。かなり積極的な活動をされていると思うのですが、どんなか、簡単なといえましょうか、今のお話に直接かかわった質問がございましたら。

私は聞いていて、やっぱり大学の教員というのは、自己肯定は非常に強いですね。自己を肯定していない人は、ほとんどいないと思うのです。自己肯定だけ非常に強いのですが、他者をリスペクトするという、その視点は重要かなと聞いていて、教育の中でも、なかなかその辺は教え切れてないような気がして。

（大野） ですから、私が言うのは、やっぱり教えるという言葉は学んでから言えと思うので、ちょっときつい言い方になりますが、我々が他者をリスペクトすることを学ばないと、学んだ上でしか教えられない。知らないことは教えられない。ですから、理屈の上で教えることはたくさんあるのですが、実感を伴って教えていることは意外と少ないと思うので。ですから、学生さんと一緒にいろいろなことをやりましょうということは、実は本当のことだと思うのです。たぶん方法論はないわけです。だから、それなら、ないのだから試行錯誤すればいい。

西野先生の話にしたって、今日、数年終わったからあの話が出たけど、出発点においては見通しはあっても、決して成功するかどうかは分からないから、非常にアドベンチャー、エンタープライズなわけです。僕らも今もまだ先が見えないけど、先が見えないことこそ面白いと思うのです。

（高橋） 北大の博物館への励ましも含まれているのではないかなと思います。

（大野） そうです。僕はそう思ってないと生きていけないぐらい、やっぱり我々の博物館も組織も弱体だし、それから予算の規模、さまざまな点で弱いから、明るく前向きに生きていないとどうしようもないということを盛り込まれたあがきなのです。

（高橋） そこはかなりよく理解できるのですが、ポジティブになっているふりをしないと生きていけないということですが、これで前半の2つのお話が終わりまして、ちょっと休憩をいただきまして15時半ですね。3時半からまた再開したいと思います。

学生とともに研究を開く展覧会 —トラベリング・ミュージアム in 台湾の実践から—

落合 雪野

みなさん、こんにちは。落合雪野と申します。鹿児島大学総合研究博物館から来ました。今、ご紹介いただきましたように南の端から来ているのですが、私自身は北大の卒業生です。農学部を卒業しておりまして、だいぶもう昔になってしまいましたが、4年間札幌に住んでおりました。久しぶりに母校に帰ってきて、こちらでお話しさせていただく機会をいただいて本当にうれしく思っています。

しかも理学部のこの建物ですが、私はここで2次試験を受けています。この部屋か隣の教室だと思うのですが、高校3年生のときに来まして試験を受けました。私は静岡出身ですので、なんて寒いのだろうということと、なんてクラシックな建物だろうと思って帰ったのをよく覚えています。そこに今博物館ができて、大勢の方が来てくださって、こういう会を開けるのは本当にすてきなことだと、さっきから思っておりました。

今日は、私たちがやっているトラベリング・ミュージアムというプロジェクトについて、台湾で行った展覧会のことを中心にお話ししていこうと思います。まずトラベリング・ミュージアムですけれども、これは決まった所在地とか住所、建物、箱物を持たない博物館です。資料とスタッフが移動して、いろいろな場所で展覧会をつくるというプロジェクトです。

これを2006年から今年までやっておりまして、メンバーは上まりこさん、この方はフリーランスのデザイナーです。それから佐藤優香さん、この方は国立歴史民俗博物館でミュージアムエデュケーションを研究されている方です。それから久保田テツさん、この方は大阪大学コミュニケーションデザイン・センターにいらっやまして、ドキュメンテーションを専門に研究されている方です。この4人がスタッフとなりまして、トヨタ財団の研究助成と科研費をいただいて、その資金で活動を行っています。

昨年5月から8月まで3カ月間、台湾で展覧会を開きました。これが「嗨！薏米珠—種子的手作藝術」というタイトルの展覧会です。台湾の東南の端に台東という県がありまして、その県庁所在地の台東市に国立台湾史前文化博物館があります、長い名前なので今日は史前館という名前で呼ぼうと思いますが、ここを開催地にして、史前館とトラベリング・ミュージアムと台東大学という現地の大学の3者が主催して展覧会をやりました。ここで得た経験を今日はお話ししていこうと思っています。

私が今日、取り上げるポイントはこれです。学生が展覧会をつくることは、西野先生や大野先生のお話にもありましたように、実践的な学習の機会になります。このときに学生が主体的に来場者を迎え、語り掛け、伝える、そういう存在になるためにはどんなことが必要なのだろうかということを、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。できれば学生がやらされているのではなくて、学生自らがお客様を迎える、こういうふうになってほしいというのが今回のポイントです。

最初に、トラベリング・ミュージアムについて大枠を説明します。その後、台湾での展覧会について、企画の段階、製作の段階、最後に開幕してからの状態をお話しします。最後に、全体をまとめていく、こういう話の構成で進めていきたいと思っています。

まず、トラベリング・ミュージアムについてお話しします。トラベリング・ミュージアムで伝えている展示のコンテンツは、私自身の研究が背景になっています。私は専門分野が民族植物学と東南アジア地域研究という分野の研究者ですが、特にジュズダマという植物に非常に強い関心を持ってこれまで調査をしてきました。

ジュズダマは、このような植物です（写真1）。北海道は分布地から外れていますが、日本ですと北

陸より南側から沖縄まで、川の縁であるとか、田んぼの横の水路であるとか、電車の線路の脇とか、そういうちょっとした空き地などによく生えている雑草のような植物です。この植物には、非常に硬い種子が実ります。



写真1：落合雪野 撮影

しかもこの種子は、真ん中にもともと穴が空いている構造になっています。ですから、人がわざわざぐりぐりとドリルで穴を開けなくても、そこに糸を通すことができます。それでこの種子をビーズのように使うと、いろいろなモノをつくることができます。そのモノをつくっている人たちのところに出かけて行って、フィールドワークをします。どんなふうにして使っているのか、どんな名前で呼んでいるのかということを知ったり、それと同時に使っている対象の植物の標本を集めたり、できあがったモノを集めたりします。こういう研究をここ12年間ほどやってきました。

実際につくられているモノを見ていただきます。もっとも基本的なやり方は、種子に糸を通してネックレスやプレスレット、そういうモノをつくって身につけるということを行います。ジュズダマというくらいですから、仏教のお数珠にしている人たちもいます。それから、ミャンマーなどでは女性がバッグにその種子を縫い付けることもあります（写真2）。

ジュズダマのなかまは、種類によって種子の形が細長かったり丸かったりと、形の多様性を示しますので、それを使い分けて、着るモノとか身につけるモノをつくっております。先月調査に行っておりましたラオスという国は、タイの北側、中国雲南省の南側にあります。そのアカという民族集団の村では、観光客用のお土産をつくって、現金収入源にしたりしています。こういうモノを集めてきて、現在約600点を収集しています。

このように一研究者として調査をしてきたわけですが、2002年に鹿児島大学総合研究博物館に職を得て、赴任することになりました。大学の先生になるのではなくて、博物館の職員になるのだということをそこで強く感じました。何年かに1回、当番になった年には特別展を開きなさいということを、館長から言われたからです。



写真2：落合雪野 撮影



写真3：落合雪野 撮影

その順番は2005年に来ました。そのときに何を展示しようかと考えたのですが、今まで収集してきたジュズダマの種子をビーズのように使ってつくったモノを、研究の成果として展示してみたらどうかと思いつきました。そして実際に取り組んだのが、第5回特別展「植物のビーズ—おしゃれ！ジュズダマ」という展覧会（写真3）です。

それまで研究者として、それなりに勉強や仕事をしてきたのですが、実際に展示をすることは初めてで、これは私にとって大きなターニングポイントになりました。いろいろなことに取り組み、試してみ

ました。その結果、展示は楽しい、展覧会は楽しいということを強く思いました。

なぜかといいますと、鹿児島県内や市内を中心にお客様が来てくださって、展示物を見ていろいろなことをおっしゃってくださるのです。「小さいころに使っていました」とか、「うちにありますよ」とか、鹿児島市内でウオッチングしておられて、「家の近くの川が護岸工事をされたので、最近もうなくなっちゃった」とか、情報や反応が直に伝わってきます。普段、論文を書いた時とはまったく違う種類のリアクションをいただけるということに、大きな手応えを感じ、面白いと思いました。

いっぽうで、悔しいなと思ったこともあります。それは鹿児島で展覧会を開いたら、ラオスの資料を鹿児島の人に見ていただくことはできるのですが、逆に、ラオスの調査地の人たちに日本の資料を見ていただくことはできないわけです。展覧会というのはある場所、ある期間に固定されます。鹿児島で10月から11月の1カ月間開催すると、なぜ東京でやらないのかと言われてたり、札幌の方に鹿児島まで見に来ていただくというのは大変だということになったりします。展覧会が時間的空間的な制約がある表現方法であるということ、痛感したところです。

これをきっかけに、調査地に行って展覧会をすればいいのだということを発想しまして、それで所在地や建物のない博物館の姿というものを試してみようということで、トラベリング・ミュージアムのプロジェクトを始めたわけです。

トラベリング・ミュージアムでは、今まで3つの大きな展覧会をしています。その最初がラオスの



写真4：トラベリング・ミュージアム 撮影

展覧会「Creating and communicating with seed beads」(写真4)です。ラオスにルアンパバーンという町があります。ここはユネスコの世界遺産に指定されている古い町で、町並みが保存されていて、すてきな寺とか古い建物があります。その中の1つをお借りして、展覧会を開きました。これによって、調査地の人たちに私が集めた資料、日本やラオス、ほかの国のものを直接見ていただくことをしてみたいわけです。開催した建物の隣がお寺だったものですから、ラオス人のお坊さんたちが修行

の合間の暇な時間に来て観覧してくださいました。世界遺産の町ということで観光客も多く、タイや欧米の人たちに展覧会を見ていただくという経験もできました。

2つ目の展覧会は、大阪の国立民族学博物館(みんぱく)で開館30周年記念企画展「植物のビーズ一つくって、つないで」という形で約3カ月間、開催いたしました(写真5)。ラオスの会場とみんぱくというのは、場の状況がまったく違います。どういってお客さんがいらっしゃるのか、建物の構造、館自体の成り立ち、そういう場の状況に応じていかようにでも姿を変えて、表現や展示のしかたを変えていくというのがトラベリング・ミュージアムの一番の特徴です。そこで、みんぱくの状況を読んで、みんぱくが収集してきたすべての資料の中から、ジュズダマという素材に光を当てて収蔵庫から出してきて展示をするとか、研究そのものを見せるとか、そういういくつかの試みをしました。



写真5：トラベリング・ミュージアム 撮影

ラオスと大阪での展覧会を経て、いよいよ台湾で展覧会を開催しました。台湾を開催地に選んだことの原点には、私自身が台湾でフィールドワークをやった経験があります。台湾には原住民を自称している

人たちがいます。今、台湾の人口のほぼ 100%に近い人たちは中国系の漢族の人たちですが、2%くらいの割合で原住民たちが住んでいます。

私は原住民の集落に出かけて行って、ジュズダマを使っていたかというようなことを調査して回るわけです。そうしますと、タオ、アミ、パイワン、ルカイなどが使っていたという情報が得られました。例えば、苗栗県に住んでいるサイシャットの女性は、ジュズダマの種子を使って、お祭りのときの儀礼の道具を作るということをずっとやってきたとお話ししてくださいました。現在ではプラスチックや金属など、人工素材に置き替わってしまっているのですが、もともとは使っていたということで、庭に植えているジュズダマを見せてくれました。また、台東市の近くにある蘭嶼島には、タオという人たちが住んでいます。ここでは伝統工芸の継承者の女性が、子供たちに種子の使い方を教えていました。

こういう人たちに私がなぜ調査に来ているかということを説明するために、同じジュズダマの種子を使ってほかの国の人もモノをつくっています、できあがったモノを集めていますということをお話します。そうすると、「それならば、私も見てみたいわ」という反応が非常に多く返ってきます。そこで台湾で展覧会を開こうということになったのです。

また、せっかく台湾でやりますので、地元の人たちにわかっていただける展覧会をめざしたい、日本人が勝手につくったのでは理解していただきにくいかもしれないということを考えました。それで、「ご当地メンバー」というふうに呼んでいる地元の方たちに参加していただいて、協力していただきました。

そのひとりが游珮芸さんです。彼女は台東大学児童文学研究所の助教授で、児童文学の研究者です。日本の絵本や子供向けの童話などを台湾で紹介するというお仕事などを行っています。彼女が日本に滞在していたこともあって、私の研究の経緯を知っていましたので、台湾で展覧会を開きたいと相談しましたら、指導している台東大学の学生と一緒にやってみたらどうかということを提案してくださったのです。今日の講演は「学生とともに開く」をタイトルにしましたが、その学生というのは台東大学の学生ということになるわけです。

それから游さんと一緒に、どこを会場にしようかということを検討していきます。いろいろな会場の候補の中から、結局、国立台湾史前文化博物館に場所をお借りすることになりました。この史前館でのご当地メンバーが、張至善さんです。彼自身がフィールドワーカーで、しかも展示教育組というミュージアムエデュケーションに関する部署に所属しておられる学芸員だったので、学生と一緒に展覧会をつくるということの意味を的確に理解してくださいました。張さんが協力してくださったおかげで、史前館で開催することができました。

そして、ご当地メンバーの中の一番の主役は学生たちです。児童文学研究所の大学院生を中心に、11名が参加してくれました。

日本側のメンバーでは、私が展示資料と展示コンテンツを提供し、開催地とのコーディネートをしていきます。上まりこさんはデザイナーですので、広報、展示空間のデザインなどを担当しております。佐藤優香さんは学習環境デザインやミュージアムエデュケーションをされている方なので、どういう形でワークショップを進めていったらいいとか、来館者の方のリアクションをいただいたらいいのかというような、やりとりのデザインを担当されました。それから久保田テツさんはメディアデザインの専門家ですので、展覧会の過程を準備から閉幕まで、とにかく映像で記録しました。展覧会は時間が過ぎると消えてなくなってしまうものですから、映像でドキュメンテーションするということを担当しているわけです。台湾側と日本側のメンバーが互いに協力しあって、また学生を主役にまわりがサポートするような形で、準備、製作を進めていきました。

では、実際の製作の過程を紹介します。2008年1月、日本側メンバーが最初に台湾に行きまして、展覧会の内容やつくり方の手がかりを渡すということをしました。その後学生たちは、正式な授業のカリキュラムの中で製作を進めていきました。2008年5月、展覧会開幕の5日前に日本側メンバーが2

度目に台湾に行きまして、直前の準備をしました。5月22日にオープンしてから3カ月間の開催期間がありますが、その間は学生が会場にいて来館者の方たちに対してガイドやワークショップをしています。8月31日の閉幕には、日本側メンバーが3度目に台湾に行って、一緒に撤収作業をして、全体を振り返るということをしました。つまり、1回目と2回目の台湾訪問の間の期間は、日本側と台湾側のメンバーがメールなどでやりとりするという状態で製作を進めていったわけです。

まず、第1回台湾の訪問の時のことを説明します。このときは、史前館に行きまして、打ち合わせや会場の下見をしました。その後、大学に行きましてレクチャーを2日間やりました。1日目は展覧会の内容、これまでどういう展覧会をつくってきたかについて話し、実際に展示する資料をあらかじめ送っておきまして、それを学生と一緒に見るということをしました。2日目は、展覧会はどうやってつくるのか、私たちらしい展覧会はどうしたらできるだろうかというようなことをずっと議論して行って、実際の作業工程を把握していくことをしたわけです。

ここでかなり意識的にやったのは、過ぎ去っていく時間のプロセスを記録にとどめるということです。佐藤優香さんが開発した「露見巻（ロケンロール）」というものがあって、これで過程を記録していくということをしました。模造紙くらいの大きな紙1枚に、その日起こった出来事を継続的にグリーンの付箋に書いて張っていきます。起きたことを、朝みんなが集まって、話をして、ご飯を食べてとずっと書いていきます。その途中に起こった自分の疑問や感想は、ピンクや黄色の付箋に書いてまた張ります。それから写真を後で張りつけて、その日に起こった出来事を1枚の紙にまとめ上げます。

これをすることによって、その日の活動のプロセスを全員が振り返ります。「今日はここまでできた」、「ここはできなかった」というようなことを視覚的に確認できる、そういうものを毎回作っていきます。これが露見巻です。学生たちが授業で活動したら、必ず毎回作ろうということで渡してきました。実際、日本人メンバーは学生の活動に立ち会えないので、露見巻があると過程がわかるわけです。そういう効果もあります。

レクチャーを終えて、私たちは日本に帰りました。その後、学生たちだけで準備が進んでいきます。最初、とにかく基本事項を決めようということで、展覧会の大枠としまして、来てくださる対象者を子どもたちに限定して考えることにしました。これは学生たちが児童文学研究所ににいるということもあって、普段から子どもを相手にいろいろな活動をしていたので、子どもでいこうということを決めました。

それから展示で資料を見せるだけではなくて、ワークショップというものも取り入れて両方で全体を表現していこうと、この基本構造を決めたわけです。その後、学生8名は広報組で広報デザインをする人たち、空間組で会場の構成を考える人たち、教育組でワークショップを考える人たちに分かれて活動をしました。

さらに、日本語の通訳が要るということで日本語の堪能な学生が名乗り出てくれまして、2人が参加しています。1人はアイドルグループのKinKi Kidsが大好きなので日本語を勉強したという女子学生、もう1人は専門的に日本語を勉強していた男子学生で、この2人がコミュニケーションの手助けをしてくださいました。それからもう1人、美術を専門に勉強していた大学院生が入ってくれて、彼がかなり専門的な目から製作やデザインをサポートしてくれました。全員で11人です。ここに游さんと張さんが加わって、私たちと延々、やりとりをするということをしていくわけです。

これは非常に大変です。目の前にいて話ができればそれに越したことはないのですが、それができないので、メールやらネットやらを駆使します。その中の一例ですが、4月29日にデザイナーの上さんが、学生に会場ゾーニングに関する相談の紙を送信しました。学生がこんなふうに会場のゾーニングをしたということ、手描きのスケッチにしてメールでよこしてきましたので、その意図を読み取って、それならばこんなふうにしたらどうかという提案をいちいち文章にして日本語で書いて、それを翻訳していただきます。こういったことを延々と、3カ月間続けていきました。

デザイナーの上さんという方は、展覧会をつくっているときに、普段からそういう構想の過程をやっておられます。あるテーマがあると、それをどんなふうに形に置き換え、ゾーニングにのせるかということを考え、スケッチとか図で表現していくわけです。ところが、1人のデザイナーの頭の中でされていることを、学生に渡すということが非常に難しいのです。普段頭の中でやっていることを、あえて文字化する、もしくは図示するということをやりまして、上さんは大変だ大変だとおっしゃっていたのですが、実際それをやってみることによって、私たち展覧会をつくる者たちが頭の中ですっとやっていることを、文字に残して記録するという意味で、非常に勉強になりました。何気なくやっていることを、あえて伝えてみるというトライアルになったわけです。

ただし、やはり学生は生まれて初めて展覧会をつくる、しかも国立の博物館の中に空間をつくらないといけないということで、かなりいろいろな戸惑いとか、躊躇とか、あるときにはけんかのようなこととか、いろいろなことがありました。そういうことがありながらも、大きな2つのターニングポイントがありまして、そのことがあったおかげで、彼女たちが主体的に展覧会をつくるようになりました。このイベントが2つありましたので、そのことをお話したいと思います。

1つ目がフィールドワークです(写真6)。私自身が研究者として台湾でフィールドワークをしたように、学生がフィールドワークをしたのです。学生は、大学に日本人が来てジュズダマという植物があつてみたい話をまず聞くわけですが、その植物が台湾に確かにある、しかも台東大学からそう遠くないところに生えているということを、自分の目で確認するわけです。種子を見たら、確かにこれは糸が通る、針が通るということがわかって、学生本人たちが植物について興味を抱き、ジュズダマがこんなに身近にあったのだということを実体験しました。



写真6：游珮芸 提供

それから、実際にこの種子を使ってモノを製作している人に会いました。工房に行ったり、大学に招いたりしたのです。そうしますと、作家さんの思いとか、製作にかける意図とか、そういうものをお話して聞き取ります。これは私が普段、フィールドワークでしていることとまったく同じです。インタビューをして聞き取る、それをします。また、モノづくりの現場に立ち会うということもしました。種子を使って作家さんがモノをつくっているところで、それを横で見学させてもらう。こうやって出来上がったブラウスが展覧会の展示資料になりました。つまり、展示資料さえも発掘してしまうということになりました。しかも、フィールドワークの全体像を露見巻にまとめて、みんなが確認していくということもできるようになったわけです。

2つ目のイベントが資料の演示です(写真7)。展覧会の直前の準備をするときに、資料の演示を



写真7：トラベリング・ミュージアム 撮影

しました。これも非常に大きなターニングポイントになりました。このときには日本人メンバーも合流して、史前館の会場に入って、どういう形で展覧会の場を設定するかということに実地で取り組むわけです。例えば、子どもたちが展覧会を見に来た時、この子たちの安全を図らないといけないし、資料の安全も図らないといけないとしたら、どういう素材でどういうサイズのパーティションを作ったらいいのか、それをどこに置いたらいいのかといったことを、延々と議論していくわけです。

空間組の学生たちが展示台に資料を仮置きしました。そのときに私が研究者として、この資料はこんなふうに取り扱ってほしいということを伝え、彼女たちは資料の扱い方を学んでいきます。すると、資料の取り扱いそのものを技術的に学ぶということだけではなくて、その資料がどれだけ製作者の人たちの気持ちを反映しているか、私が研究者としてどれだけ大事に思っているのかということも、同時に習得していくわけです。

その上で、空間組は自分たちが習得したことを、今度は教育組や広報組の学生たちにプレゼンテーションしていきます。学生全員で来場者をガイドをしますから、全員がそのことを共有しておかないといけないのです。ですから、会場で実際の展示物を前に、空間組がほかの学生たちにプレゼンするということをしました。そうしますと、教育組や広報組の学生から、「そこはおかしい」、「もっとこうしたらいい」というようなディスカッションが起きました。

そうやって会場でやりとりをしながら場を作っていったことで、会場での演示の時間が、資料の意味や展示の意味を全員が共有するという時間になったわけです。これには非常に時間がかかります。なかなか進みません。史前館の方たちが心配して、「明日、展覧会が始まりますが、大丈夫ですか」というようなことをおっしゃってくださるのですが、それを張さんが上手にブロックしてくださいます。「大丈夫ですよ、今、学生が勉強しているので、私たちが勝手に手を出したらだめですよ」というようなことを、ちゃんと説明してくださって、そういうあたたかい雰囲気の中で準備が進んでいきました。

最終的に、教育組の学生がワークショップのシナリオを考えると、資料の意味とか、資料の大切さというようなことを織り込んだシナリオを作って、それを来場者の方たちに受け渡すということをしていくことで、全体がつながりました。空間組が習得したことが学生全員に共有されて、最終的には来場者の方に伝わるということ、彼女たち自身が実践したわけです。

いよいよ展覧会が開幕します。開幕の5月20日は、朝からプヌンという原住民の小学生たちが音楽を奏でてくださいまして、非常に華々しいオープニングをしていただきました。日本だったらたぶんテープカットをしますが、台湾ではほんとうに幕を引いて開幕するんですね。史前館の館長さん、台東大学の学長さん、人文学部の学部長さん、児童文学研究所の所長さん、台東県知事代理が出席していて、私もふくめた全員でリボンを引きますと、学生が作ったエントランスの布製のポスターが出てきます。これを終えて、来場者の方たちはいよいよ会場に入ることになるわけです。

これができあがった会場です（写真8）。実は、前日の夜10時ぐらいまで作業をしていまして、やっとできてほっとしているところです。広報組の学生たちが作ったイラストレーションの会場の図がそのままパンフレットになって、来場者の方に配られています。

会場には、展示を見るスペースとコミュニケーションのスペースとがあります。展示を見るスペースでは資料を一点一点じっくり見てください、何かいろいろなことをおっしゃったり、メモしたりしたときはコミュニケーションのスペースでやりましょうと、スペースの機能をわけています。真ん中に小さな空間がありまして、2つのスペースを意識的に区切りました。子どもたちが対象なので、資料を見る空間とコミュニケーションのスペース、それをつなぐ中間のスペースという形で会場を構成しました。



写真8：トラベリング・ミュージアム 撮影

展示した資料は全部で39点です。もともと私の収集資料38点を台東に送っていたのですが、その中から学生が29点を選定しました。ここに、学生自身がフィールドワークで集めた資料が8点入っています。さらに、話を持ちかけてみしたら、史

前館にもジュズダマの収蔵資料があるということがわかりました。それを1点出してきていただきました。張さん自身がフィールドワークをしたときに集めたという資料も1点出てきました。

こうやって開催地ならではの資料を組み込んで、展覧会の展示資料を構成できたわけです。学生がフィールドワークのときに製作過程を観察したブラウスの資料も出ています。そのときにインタビューした作家さんの人となりパネルで紹介されています。また、私が2004年に収集できなかった資料を借りてきてくださりまして、これも展示することができました。これについては、同じような内容の展示が史前館の常設展示の方にもありますので、そちらとリンクさせるような形で提示しております。

さらに、学生が展覧会をつくったという、その事実自体も展覧会の中で提示しています。展覧会の二重の構造として、資料を見てジュズダマについて伝えるということに加えて、学生たちがつくったことを伝えるということをしているわけです。展覧会ができるまでということで、どういう学生が参加したかということで全員の写真と名前、つくっている様子、フィールドワークや露見巻の作成、専門家からのレクチャー、そういう過程をパネルにして提示していくということをしました。

こちらはワークショップです(写真9)。ワークショップは会期中に全部で16回ありまして、それに学生がスタッフとして参加しています。館の中庭に植木鉢にジュズダマを植えたものを置きまして、



写真9：張至善 撮影

生ものは中で展示できないので外に出したわけですが、ここに子どもたちが集まって、植物自体を観察してもらおうということをしします。ジュズダマを初めて見て非常に感動したといった実際の体験が学生自身にありますので、そういうことも織り込みながらお話をしていくわけです。

資料を観覧するスペースで、学生のひとりが子どもたちに語りかけています。このとき、子供たちは黄色いボードを持っています。フィールドワーカーのフィールドノートにそっくりなシートを作りまし

て、自分の好きな資料1点を選んで、それをじっくり観察して、発見した項目をシートに書き込むという形でのワークショップをしました。展覧会がフィールドワークの場になって、そこでフィールドワーカーになる体験していただく、そういうプログラムなわけです。そのやり方を学生が子どもたちに説明して、子どもたちがこれを聞いたこの後、散らばって自分の好きな資料を1つ決めて、それについてずっと書いていくということをしている状況です。

全部のプログラムが終わった後に紙を渡しまして、そこに子どもが自由に感想を書いて、それを壁に張り出すということをしてもらいました。こうしますと自分より前に来た方の反応というのを見ることができるようなんです。時をたがえて参加した来場者の方たち同士のコミュニケーションのツールとして、このシートを使っています。シートの1枚を見てみますと、ジュズダマのなかまの種子の形は分類学的に4種類あるのですが、さらに1種類新しく自分で創って、ヒョウタンのような形の種子を描いてしまった子どもがいます。こうやって、来場者からいろいろなリアクションをいただくということになっていくわけです。

展覧会が閉幕した後、ご当地メンバーの感想を聞いてみました。張さんは事故を心配したそうです。史前館側の責任者として、これは当たり前のことだと思います。ところが、学生たちが練りに練って作った会場の状態が非常によかったために、結果的に事故がおきなかったということをおっしゃっていました。游さんは学生の評判が本当によかった、ガイドが熱心で素晴らしかったということを、いろいろな方から聞いたということをおっしゃっています。学生たちは、いろいろなとなし得たということでしたが、その中に、これからも子供たちに伝えることをしていきたい、こういうことを続けていきたいとい

うことを言った学生がいました。自分たちが子供たちに伝えたということが、ある種の自信になったのでしょうか。私は跳び上がるほどうれしいのですが、最終的にこういうやりとりがありました。

最後、まとめたいと思います。私たち大学博物館の人たちは、自分たちが研究者で、展覧会に来てくださったお客様に、直接自分たちの研究の成果を渡すということをしています。時には展示を作る専門家の方と組んで来場者の方に渡すということもありますが、いずれにせよ、両方とも専門家から非専門家に研究の成果を渡すという構造です。

ところが今回、台湾の展覧会で私たちが意識的にやったのは、その真ん中に学生という専門家でない人たちを入れてみるということです。それが「トラベリング・ミュージアム in 台湾」の一番のトライアルでした。

これをしてみますと、思いがけず、学生自身がフィールドワークをしました。そのことによって学生たち自身がジュズダムに対する体験をする。そのことを元にして広報を作ったり、会場を作ったり、ワークショップを構成したりし、展示資料も見つけていきます。そうなってくると、自分たちが展覧会をしているのだという気持ちが生まれます。頼まれたから、授業だからしているのではなくて、私たちがお客様に何かを伝えたいという強い意志、そういうものを獲得して学生が変化していきました。

つぎに資料を演示したこと、これによって資料の扱い方だけではなくて、資料の持っている意味、なぜ標本が大事なのかということや、その背後にいる製作する人の問題、それから研究活動の問題、こういうものをひっくるめて学生が習得して、本人たちが主体的に資料を尊重しようというふうになりました。それが最終的に来場者にも共有されていく。私がお場に居合わせられなかったのが悔しいですが、態度であったり、言葉であったり、いろいろなことで来場者にも伝えていくということをしていくわけです。

トラベリング・ミュージアムでは、伝え共有する手段として展覧会をつくることに取り組んでいます。つまり、今まで研究者が論文や学会だけで開いていた成果を、展覧会をやることによって調査地もしくは社会全体にまで開いていこうということです。そうすると、開催地の文脈、この場所がいったいどういう状態なのかということに沿った形で伝える、そういう伝え方を考える必要があるということになります。

それからできあがった展覧会だけではなくて、展覧会をつくっていくプロセス、台湾の場合ですと1月から閉幕までのすべてが、経験や思いを共有するための時間になります。今まで研究者が一方的につくってしまっていた展覧会を、地元の人たちがつくる展覧会に変えたい。特に人文学関係の博物館ですと、展示物をつくって使っていた人、それを研究して展覧会をつくる人、展示されたものを見る人という、この3つの立場の人が完全に分断されて、役割が固定されてしまっています。トラベリング・ミュージアムを台湾で開くことによって、ここを変えてみようと思いました。今まで展覧会をつくっている人が見る人になったりするし、見る人たちが何かを作ることでもできる。立場をシャッフルさせることによって、展覧会は伝えを共有する手段になるのではないかと実際に試してみたわけです。

最初に今回の講演の視点をみなさんにお伝えしました。これについて、台東大学の学生たちが私に教えてくれたことですが、まず、研究者の私が学生に展覧会について伝えます。伝えた後、学生と私は対面した状態でいます。その後、学生は私の方を見ているのではなくて、振り向いて、お客様の方に向き直って、いらっしゃいとお迎えするように姿勢を変えていかないといけないのです。そのときに、お客様に対して、自分たちの言葉で自分たちの体験を語る。このことが、調査地に研究を開く上で重要であることもわかりました。これは私たちが予想だにできなかったことですが、学生にはそれができました。あらかじめプロセスに入れていたわけではなかったのですが、フィールドワークをしたり、自分たちで資料を手で触って演示したりしたことが、学生たちの中に体験や実践となって入り込んで、それが最終的にそういうふるまいへと変わっていったということです。

今日はこのことを、ぜひ北大博物館のみなさんや、ほかのみなさんにお伝えしたくて、お話をしてきたわけです。この講演には何人かの方から写真や図版を提供していただいております。私は卒業生の1人として、北大博物館ができたことがハッピーですので、ぜひ、この博物館をみなさんが使い倒していただきたいと思います。学外から来てくださる方は来館者として使い倒すわけですし、学内の学生やほかの部局の教員がいかようにでも使える、いろいろな使い方の余地といいますか、スペース、役割が大学博物館にはあると思うのです。

今回のお話は博物館の役割の中のごく一部を紹介しただけですが、私は本当に短いミュージアムでの在職経験から、こういうことをみなさんにお話しできたわけです。これからはいろいろな視点のあて方、役割の見つけ方がおそらくできると思いますし、それに応えてくださるのが北大博物館の度量だと思っているわけです。そのことを、ぜひみなさんをお願いして、私のお話を終わりたいと思います。どうも、ありがとうございました。

(高橋) ありがとうございました。素晴らしい講演ですが、今の話に限って、もし何かご質問があればお願いします。

(参加者 B) 非常に興味深いお話をありがとうございました。たぶんやる方も見る方も楽しいトラベリング・ミュージアムだと思うのですが、経費は人件費、旅費、だいぶ掛かっていると思うのですが、経費負担はどうされたのですか。

(落合) トヨタ財団が「助成金が活きたとは」という研究のプログラムを試験的に作っていたのです。それに私たちが応募しまして、そこから資金をもらいました。ですから例えばラオスの展覧会ですと、実際にその場にトヨタ財団の担当者が来て、様子を見たりしていました。

(参加者 B) その場合に財団の方のメリットというのはどうお考えですか。

(落合) 来場者の方は先生とまったく同じような質問をされます。トヨタは東南アジアの人に有名ですから、「車の会社のトヨタが文化的なことを支援しているのですよ、ほら、ここにトヨタの人もいましょう」と言うと、すぐその場で理解されるというようなことがありました。

私たちはトヨタ財団にとってもメリットになるようなつくり方、伝え方を意識的にしています。それが助成金を活かすことであり、助成金のドナーに対しても有益になるということです。

(参加者 B) 今日のお話はみんなそうだと思うのですが、非常に丁寧な教育ですよね。そのためにはコストが掛かるというのが一番の問題で、つまり今の教育体制は学校の先生が1人で40人を教えるという、その程度のコストしか払っていないわけですよ。ですから例えば台湾に行ってこれだけのことをやる、非常に得るものが大きいと思いますが、そのコストを誰が払うのか。そうすると一部の人間しかその教育が受けられないだろうという問題が、いつもかかわってくると思うのです。そのところをどうお考えですか。

(落合) 実は今回の開催に関しては、史前文化博物館の方で、施設の提供や広報活動のコストなどを多大に負担していただいています。それがなければ、こういう形での開催は無理でした。私たちはそれをいただいて開催させてもらった以上、何らかの方法で積極的に返したいわけです。11人の学生しか参加できない、当事者も私たちだけなので、今日、北大博物館に呼んでいただいて、みなさんに私たちの経験を公開することで、せめてそれに対するお礼に代えられればと思います。今日、みなさんに来ていただいてよかったと思いますし、そういう意味での私のプレゼンテーションだったというふうに受け止めてくだされば、ありがたいです。

(参加者 B) 分かりました。ありがとうございました。

(高橋) どうも、ありがとうございました。

北大総合博物館における学生教育の展開（前半）

高橋 英樹

「北大総合博物館における学生教育の展開」という話で、私が前半をやりまして後半を湯浅先生がやります。私はここで教育 GP について紹介するのと、2つの授業といいたしめようか、これまで北大の博物館でやってきた学生教育、エコキャンパスとパラタクソノミスト養成講座、その2つの話を紹介します。その後で湯浅先生からプロジェクト実習、展示の改修、今後の展望というようなこととお話したいと思います。

これは小さいもので恐縮ですが、教育 GP とここで言っているプロジェクトはここに当たります。これは文部科学省がやっている予算的な措置の総体です。大学教育改革の支援ということで、「実効性のある分野への選択と集中により必要予算を措置」ということで、今までですと満遍なく予算はしっかりとつけて好きにやってください、教育してください、研究してくださいだったのですが、最近ではよい試みを選択して、そこに集中的に予算をつけますから頑張ってください、ただし頑張らないところにはもうあげませんというような考え方が、だんだん強くなってきているわけです。

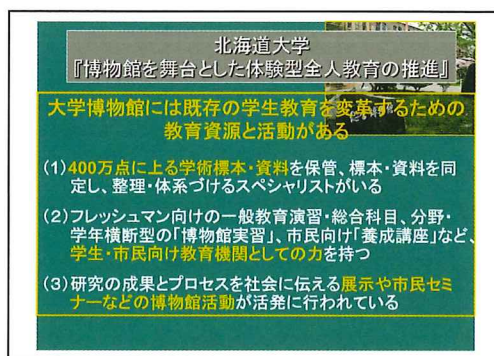
その最たるものはこの2つで、いわゆるグローバル COE、あるいは今までですと COE というような予算が1つあって、もう1つは国際化の選択が1つあります。今回、お話ししている教育 GP というのは大学の学生教育の中では一番基礎に当たる部分で、これは今年度から新規で「質の高い大学教育推進プログラム」といっていますが、これを教育 GP と略称で言っております。もちろんこの下にはいろいろな国の審議会があって、こういったものを提言していったというふうな構造になっています。

教育 GP を取る際にヒアリングに行って、こういうことをやりますから、ぜひ、お金をつけてくださいというようなことをやるのですが、そのときに作った資料です。北大がもらっていますプロジェクトが「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」。先ほども全人教育は何ぞやという話もありましたが、大学博物館はいろいろなところがありますが、北大の博物館はこれだけのことをやれる教育資源の活動が、すでにありますよというようなことを訴えたわけです。

資料の保管の点数、そしてそれを管理するスペシャリストがおります。すでにいろいろな教育演習などを我々はやっていきますし、市民向けの講座なんかも持っています。ですからすでに教育機関として力を持っていますということです。それと、この研究の成果とプロセスを社会に伝える展示や市民セミナー、これは大学ではなかなかない、一般的には普通の学部になような機能なのですが、そういう博物館活動を活発に行っている場所ですよということです。ですからこのような特徴や力を持っている博物館に、ぜひ、大学の学生教育で働かせてくださいというようなことをアピールしたわけです。

ここでは先ほどもちょっとあったのですが、一連の科目の流れをつくらうということで、最初のフレッシュマン、1年生向けのものから少しステップアップさせて、最後に社会体験教育をやろうというような流れを作ります。今、私が話そうとしているのは、そのフレッシュマンの1年生向けと、ステップアップのところで我々が今までやっていた科目の紹介ということです。

フレッシュマン向けでやっていた1つは、北大のキャンパスを使った一般教育演習です。札幌の方はご存じですが、北大のキャンパスは生物多様性に非常に富んでいる、遺跡もある、歴史的建造物もある



る、こういった教育資源があるので、これを利用した教育を我々はやっていこう。このもとがキャンパス全体を博物館に見立てた、キャンパス・エコ・ミュージアムという構想です。

ここでは「マスタープラン 2006」とありますが、この1つ前の世代、1996年の「マスタープラン 96」から、もうすでに始まっております。だいたい、この博物館ができるときに、実際にはこういう考え方があって、キャンパス全体をエコミュージアムにしよう、その拠点がこの新しく造る博物館なのだという考え方があったのです。これを生かしたような教育ができないかということなのです。これは、今は「キャンパスマスタープラン 2006」で、改訂版といひましょうか、96から進化した形です。

その中で自然、生態環境の骨格としてキャンパスの中を位置づけた。この中では植物園とも連携させてキャンパスを位置づけて、特にこの川、サクシュコトニ川という川を1つの骨格にしたような自然、生態環境をまとめたのですが、我々はこれを使って教育に生かしていこうと考えたわけです。

「エコキャンパスの自然と歴史」、フレッシュマン向けのものをやっているのですが、何を狙っているかといいますと、あまり高い目標を持つと学生にも分かりにくい、しかも1年生ということですので、キャンパスで見られる植物や昆虫、遺跡、建造物について理解を深めて、まず学外の人に説明できるようになろうと、そこを目指しました。これをやれるようになれば、その学生たちはキャンパスを愛し、愛校心を強めて、その中で向学心がだんだん芽生えてくるのではないかと思います。

よくあるのに1年生になって夏を過ぎると、だんだん学校に出てこなくなるというような話が昔よく大学であったのですが、キャンパスの中で自分たちがいろいろと興味あるものが見つけれらるゝことがあれば、キャンパスから足が遠のくということはないだろうというような発想もあります。

授業の中では学生を4つの班に分けます。植物、昆虫、考古、建築です。そこで自主学習をやらせて、実地調査、そして成果を最後の授業の日に発表するというようなことをやっています。普通の授業時間には、それぞれ植物、昆虫、考古、建築の先生たちが順番にやって、キャンパス全体のそういった解説、実際にキャンパスに出ていろいろな解説、説明をしたりして基礎的な知識は全員に与えるのですが、プラスしてこういうことをやるわけです。

ですからこれは実は授業時間以外にやっているのです。この一般教育演習は一番学生たちにとっては厳しいと、時間的には大変である。我々も実は大変で、こういうふうに自主学習、実地調査をやるとすると、普通の授業が終わった後か土日しかないのゝ、我々は土曜日もキャンパスに行って一緒にやり方を教えてあげるとか、そういうことになってくるものゝですから、教員にとってもかなり厳しい授業ではあるのですが、得られるものゝ学生にとっては大きいのかなと思っています。

ここでは我々は基礎的な発表技術とか、リテラシーを身に付けるというようなことができればいいだろうと。それと自主学習ゝので主体的にだんだん学べるようになるかなというゝことと、一般教育演習ゝので将来はいろいろな学部に進んでいく学生が受けていますから、なるべく班分けのときに異なる専門分野の人をごちゃ混ぜにするようにしています。

ですから男女を合わせたり文系と理系とかという形で、なるべく異なる専門分野を志向するゝような学生が、相互理解できるようにしようというゝことをやっています。これがうまくいくと、比較的上の方に行っても違う学部の子同士で知っている子がいるとか、そんなふうにもなっていく。

これは1つの例です。たまたまといひましょうか、私のパソコンに残っていた、学生が最後の授業のときに発表したパワーポイントです。これは昆虫班の人がやってくれた2年ぐゝらい前のものゝでしょうか。糞虫についての調査です。色合いが私のこのバックグラウンドにしたものゝですから、ちょっと違うのゝですが、それと彼らはこのアニメーションが好きで、こんなにたくさんアニメーションを作ったのゝでちょっとわずらわしくなったのゝですが。

自然に対する理解、時間的・空間的な変化があれば多様性があるだろうというゝことで、キャンパスの糞虫を調べたのゝですが、季節や月による変化があり得るゝのではないか、あるいは場所による変化も当然

あるだろうというようなことで調査をしましたということ。彼らはこうやって調査風景も自分たちでももちろんデジカメで撮って後で、自分たちのやってきたことすべてを最後に発表するということになります。

幸いなことにキャンパスには、こういう糞虫が集まるような家畜の糞がたまっているような場所があります。これもなかなか普通の日本の大学では得難い風景ですし、今のキャンパスの中では逆に嫌われている部分でもあるのですが、でも実はこういうところに生物の多様性がちゃんと息づいているということを、彼らは感じながらこうやって糞虫を集めております。

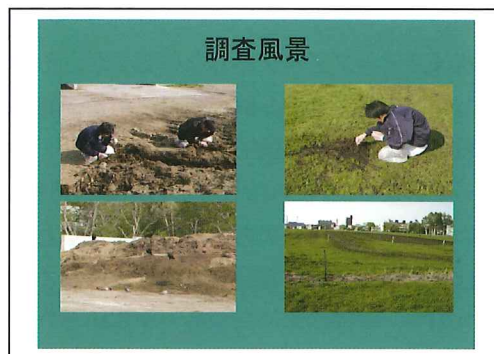
これは部屋の中に持ってきて標本にするときに、どうやって標本にしていくかというような作業をやって、種類を決めていくというような作業をやります。彼らには科学の基本として自然科学などでよくある仮説を立ててそれを検証する、先ほどもちょっと大野先生の話にもありましたが、ああいうことを一応学んでもらおうということです。ですから季節とともに暖かくなってくると、種類や個体数が増えるのではないかと、場所によっておそらく違うのではないかとというようなことを仮説として立てて、実際に結果を出していく。

結果についてはもっと表があるのですが、ここではそれは出しませんが、仮説は正しかった。これだけの個体を捕獲できました。最低限、彼らはキャンパスの自然を理解することはできたというようなことが書いてあって、最後、だいたいこういうまとめが多いのですが、最後に感想的なことを書いて、いろいろ楽しく学べました、こんなような感じのことがやられています。

例えばこれは建築班。こちらは自分たちで、歴史的な建造物がいろいろあるものですから、キャンパスの中で実際に行って写真を撮って、その建築のデザインや意義を勉強して、それをここではクイズ形式でみんなに発表してみようということで、1つのアイデアですが、プレゼンテーションとしてそういうことをやってくれました。これは北大の教員であればだいたい知っていることですが、1年生になったばかりの子たちはこんなことは知りませんので、ああ、なるほどねということで、北大のいろいろな建築についてもよく学ぶことができた。こんなことを学生たちが最後に発表すると。彼らは遊びにだんだんできてきているのですが、エレベーターの階数の表示法が、エレベーターの種類によっていろいろ違うと。これは何学部にあるかとか、こんなことまでだんだんと入り込んでいっておりました。

これがキャンパスを利用した、フル活用したエコキャンパス、エコキャンと我々は言っているのですが、授業ということで。これは実は来年度からもう1個増やして、エコキャンパスの普通版と植物学編

というものをやりまして、植物学にもう少し特化して、5人ぐらいの先生で植物だけをやる。先ほどもありましたように北大キャンパスと植物園というのがつながっていますので、来年度では植物園の先生



にも参加していただいて、もっとキャンパスを広げてエコキャンパスの授業をやりたいと思っています。

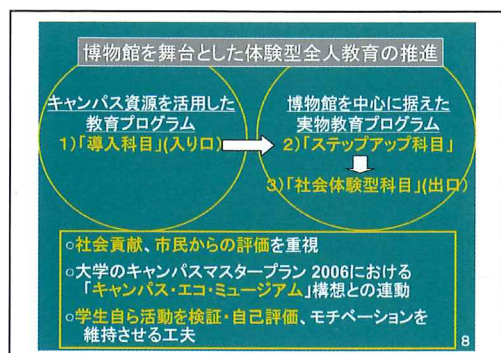
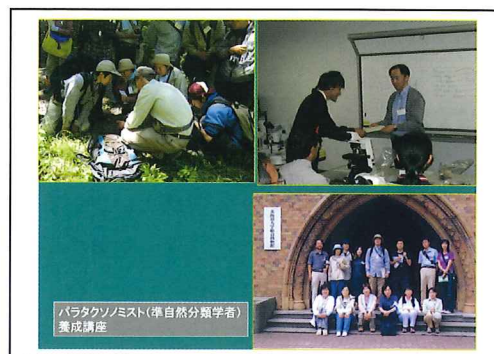
これはステップアップの方なのですが、そういったものを通過して次は我々の持っている学術標本を利用しながら、もう少し同定能力とか基礎的知識を深めていこうというプログラムがあります。その中では我々が今まで博物館でやっていたのは一般市民向けのパラタクソノミスト養成講座、こういうものをやっていました。これはももとは総合博物館の中にいろいろな市民のボランティアの方がおられて、そういったボランティアの方たちを増やすとか、あるいはステップアップさせるというようなことのためのもので、学術標本の同定能力を高めたり、整理するための基礎知識を教えていくというようなものなのです。

これは今まで一般市民向けにやっていたのですが、意外とこれを受ける人が例えば調査会社の社員の人が、今、いろいろなところでアセスメントをやらなきゃいけないということが多いので、そういった方たちが受けに來たり、時々、実は北大の学生が来るようになってきたのです。これは我々にとっては意外で、北大の学生だから普通は学部とか何かで実習とかいろいろあるからいいのではないかと、何で受けに來るのかなと思っていたのですが、これは違う学部だと普通は受けられないですね。

理学部の学生は理学部の実習を受けられますけれども、例えば農学部とか、あるいは違う分野のものは普通は受けられないわけです。ところが興味のある学生は当然いるので、そういうこともあって意外というということで、来年度から学生向けのパラタクソノミスト養成講座を開講しようと考えています。

これは今年度までやっている、どちらかという一般向けの養成講座です。こんな形で野外に出ていて講師の先生が、今はスゲの種類の見方、あるいはデジカメで植物を撮るときはどうやって撮ったらいいかを教えていて、熱心にみんな集まっています。残念ながら熱心に集まってくるのは学生ではなくて、調査会社の社員の方とか一般の市民の方です。最後にこうやって認定証をお渡しするというようなことをやっていますが、これをもう少し学生向けに充実させようと考えています。

この養成講座も大変で、すでに今年の1月から3月までだけで、これだけやります。これだけあるということで、かなりやり過ぎだとか、大学の博物館が何でそこまでやるのだという評判があるのですが、学生向けにもう少し充実させていけば、これがステップアップ科目になります。



その後がやはり博物館らしいという社会体験というところ。これが今まで大学の学生教育の中では、あまり充実していなかった分野だと思うので、次の話からが重要かなと思います。このところですね。今、言った導入でキャンパスを使う、ステップアップで博物館中心に据えた実物教育。ここも博物館を使うことがあるんです。社会体験型科目の出口の部分ですが、ここが今回のプロジェクトの目玉に当たるところかなと見ております。湯浅先生にはその次を引き取っていただいて、私はこれで終わりにします。

北大総合博物館における学生教育の展開（後半）

湯浅 万紀子

北大総合博物館の湯浅と申します。博物館教育を担当いたしております。私からは、当館で現在行っている授業のうち、2つをご紹介します、それから教育 GP の展望についてお話ししたいと思います。

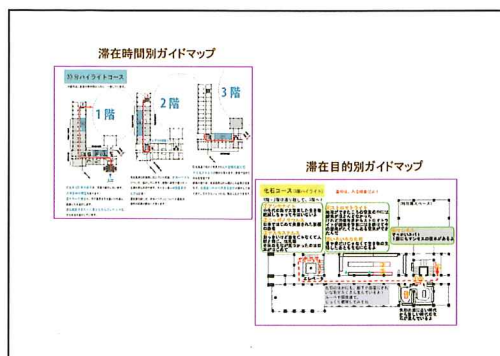
まず1つ目、博物館コミュニケーション特論という、主に理系の大学院生を対象にした半期の授業についてお話しいたします。この授業では大学博物館の存在意義を考察し、それを社会に伝えるためのプログラムを学生自身で企画、運営し評価しています。授業のゴールはこのように5つ設定しております。まず大学博物館の在り方について考察を深める。第2に、大学博物館における学生自身の研究を深め、専門知識を養う。第3に、普段、自分の所属する研究室では出会えないような異分野の学生や専門家と協働することで、協調性や新しい視点を得る。第4に、市民との対話やグループワークを行うことで、コミュニケーション・スキルを身に付ける。そして、社会に向けての活動をする中で責任感を養うことです。

授業の流れとして、まずこの北大総合博物館をよく知ってもらい、北大総合博物館が社会に果たすべき役割を学生自身に考察してもらいます。その後に学生にこの博物館の課題を見いだしてもらい、その課題を解決するためのプロジェクトを企画、立案してもらいます。そしてプロジェクトを学生たちで運営し、記録し、評価するという実践をしています。

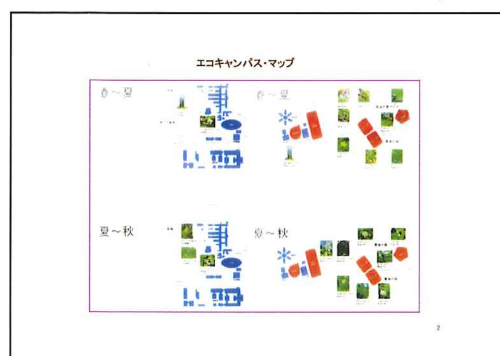
活動の運営・記録・評価にグループワークで取り組む際には、ポートフォリオを作ってもらい、活動履歴を確認していきます。毎回の授業については、ホームページで学生自身の言葉で報告を書いてもらっています。所属と名前を載せた署名原稿として、自分たちが今日の授業ではこういうことをした、そして次のプロセスに向けてこういう課題がある、次はこういうことを行いたいということを写真入りで紹介する記事を、毎回の授業の後に書いてもらっています。そうすることで彼ら自身が自分たちのプロジェクトは今どの段階にあるのか、プロジェクトを遂行していくためには何が必要なのかを確認し合う、そういうことをしております。グループワークとなりますので、授業では毎回グループの報告を受けて全員でディスカッションしますが、他のグループの活動内容をこのホームページを見ながらも共有していく、そのようなツールとしてもホームページを利用しています。

私が北大にまいりましてこのゼミを担当してからまだ2年です。まず去年のゼミの取り組みをご紹介します。受講生は13名でした。理系の学生が12名、教育系の研究生が1名です。4つの班が結成されました。博物館の入り口を改善したいとする班、エコキャンパス・マップを作成したいとする班、アイヌ文化についての教科書展示を提案したいとする班、そして人文科学系のイベントを企画、運営したいとする班です。各グループでプロジェクトを運営して評価して、そして更にもう1つのウェブ班が4グループの活動を記録して情報発信していく、このような構成でゼミ全体を運営していきました。そこでは様々な研究室から集まった学生たちが協働しましたし、社会に向けての情報発信をしました。そして市民の方とも関わりを持って、授業全体が運営されていきました。

入り口改善班は、この博物館に皆様、何度もいらしていただいてよくご存じだと思うのですが、博物館入り口で館内の全体構成がつかみにくい。彼らはこれを課題と捉え、滞在時間別のガイドマップ、滞在目的別のガイドマップを作成いたしました（スライド1）。来館してどれだけの展示物の量があるかすぐに分かりにくいと思うのですが、例えばスライドに提示した左のマップでは30分しか時間がない方や1時間の方に向けて、それぞれ学生によるお勧めコースを作ってみました。そしてスライドの右側、こちらは滞在目的別のガイドマップです。いろいろな展示がありますが、まず今日は化石を見たい、そういう目的でいらした方には化石コース。普段、1階から順々に見ていただくのですが、まず化石を見



スライド 1



スライド 2



スライド 3



スライド 4

をチェックして支援する運営スタッフ、ワークショップの様子を録画して記録するスタッフで行ったワークショップです（スライド 4）。

そして 2 回目は「デスモスチルス化石の歴史」というタイトルで、事前申し込み制で中学生 5 名を対象に行いました。理学院で哺乳類の化石の研究をしている学生が、当館の展示物である絶滅した哺乳類、デスモスチルス化石の歴史についてお話ししました。普段、展示解説といいますと展示物そのものの解説をすることが多いのですが、発表者は大学博物館における研究と展示のプロセスを伝えたいと考

たい方は 3 階にお上がりくださいというようなお勧めコースを作りました。

それからエコキャンパス班。彼らはこの博物館と外に広がるキャンパスとの関連性を強めることを課題として捉えて、このようなエコキャンパス・マップを作成いたしました（スライド 2）。

次に教科書班。彼らはアイヌ文化に関連した展示のインパクトが弱いことを課題として捉えて、アイヌ文化の展示と中学校の教科書の記載記事とを関連付けたこのようなリーフレットを作成いたしました（スライド 3）。

そして人文科学系のイベント、カフェ班。彼らは総合大学の総合博物館でありながら、自然史系の展示が多く、人文科学系の視点が弱いのではないかとすることを課題として捉えて、歴史をテーマにしたワークショップを企画、運営、評価いたしました。最近、全国で展開しているサイエンス・カフェについて皆様もお聞きになったり参加されたことがあるかもしれませんが、そのサイエンス・カフェの歴史版、ヒストリカル・カフェを開催したいと取り組みました。そしてウェブ班がヒストリカル・カフェのホームページのサイトを制作したり、カフェのチラシを作成するなど、PR や記録を担当いたしました。

ヒストリカル・カフェは 3 回シリーズで行いました。1 回目は「化石としての時刻表」というタイトルで、時刻表が大好きな理学院の学生が、時刻表が「物」として残っていることの意味について、博物館の化石の研究になぞらえて解説するワークショップを、今、皆様のいらっしゃるこの部屋で行いました。事前に申し込みされた市民の方 20 名とコミュニケーションをしながら解説を進めるワークショップ形式で行い、当日の運営は、カフェ班以外のグループの学生も協力しました。このように発表者の他に、発表者とワークショップ参加者を結ぶファシリテーターや、参加者が発表内容を理解しているか

え、デスモチルスの化石が発掘されて、研究されて、展示されていくそのプロセスを中学生に伝えるシナリオを考えました。中学生から寄せられるであろう質問を想定しながら、カフェ班でリハーサルを

重ねて準備しました。



スライド5

これは当日の様子ですが、博物館の入り口の前でまずコミュニケーションして、お互いにリラックスできるような雰囲気をつくり、中学生たちの来館回数やどれほどの知識を持っているかについてこの場で少しお話ししながら確かめて、館内へと誘っていきましました。このように、中学生5名に対して、発表者や運営スタッフである学生たちがとても近い場に立ち、発表者はオリジナルの解説ツールを使って語りかけるように解説しました（スライド5）。実

物の化石に触っていただいたり、館内の様々な施設を巡って映像室では発掘当時の映像を見ていただいたり、化石クリーニング室ではクリーニング作業を見ていただきました。その後また最初の展示室に戻り、化石が発掘され研究され展示されるに至るプロセスについての2時間近い解説を受けた後で、中学生たちに最初に見た化石を見直してもらい、更なる解説を行いました。最後に、この解説を受けた感想を発表し合い、中学生たちと発表者、運営スタッフでコミュニケーションする場を設けて、ワークショップを終えました。

ヒストリカル・カフェの3回目は、「北大の音楽史」というタイトルで、理学院の学生が北大の学生オーケストラ、北大交響楽団の歴史をひもとく講演を行いました。発表者自身が学部時代にこのオケに属しており、北大交響楽団と西洋音楽との関わりについて解説しました。会場は皆様がいらっしゃるこの場所で、自由参加で約60名が参加してくださいました。当日は今日のように会場を設営しまして、発表者とファシリテーターとの対話形式で進行し、このようにオケの現役メンバーによる弦楽四重奏も織り交ぜた会にしました（スライド6）。時には聴衆に意見を求めたり、演奏者に感想を求めるなどして、一方的な講演とならないように配慮しながら進めました。



スライド6

ヒストリカル・カフェは3回とも様々なメディアで報道していただきました。学生たちにとっては、メディアで報道されたり、いろいろな方からご意見を直接いただけたことは、とても刺激的であり、そして励みにもなり、同時に課題も実感できたと申しております。

ゼミのその後ですが、ヒストリカル・カフェに毎回ご参加くださった方にお招きいただいて、その方が館長をされていた博物館の収蔵庫や展示室をご案内いただいたり、2回目のカフェに参加した中学生がカフェから発展させた自由研究を持って再訪して下さったりということがありました。一方、ゼミを指導する側の私は、ゼミの終了4カ月後に授業評価を行うため、受講生へのフォーカス・グループ・インタビューを行いまして、ゼミを振り返ってもらいました。その結果は後でご紹介します。学生たちには次の年度のゼミへの協力を要請して、2年度続けての取り組みが今も続いております。

今年のゼミの受講生は5名でした。理系の学生4名と文系の学生1名、そして昨年度の受講生が随時参加しました。この授業は半期の授業です。今年はグループに分けずに5名全員で、この博物館にカフェを設ける企画、提案を行いたいと取り組みました。北大総合博物館、大学博物館のカフェの役割

は何か、どのような機能が必要なのか、ただお茶を飲むスペースがあればよいのか、運営はどうすればよいかということを徹底的に議論いたしました。そして先進事例として他の博物館にヒアリングしたり、実際のニーズを把握するために、来館者や大学祭でキャンパスにいらした方々、非来館者にも面接調査を行い、更に学内の学生には質問紙調査も行いまして、カフェのニーズを確かめてまいりました。このような調査の分析を経て、学生たちは自分たちの博物館カフェ像を描いていきました。まずカフェの目的としては、この博物館の来館者層を拡大すること、そしてその来館者の見学の質的向上を目指すことと設定しました。そしてカフェの機能を4つ決めました。当館の使命をアピールできるようなカフェとすること。そして、来館者の知的好奇心を喚起するようなカフェとすること。更に、とても広い館内ですので、休憩スペースとしての意味も持たせたい。そして、来館者、学生、博物館や学内のスタッフや研究者、様々な人のコミュニケーション空間をつくりたい。この4つの機能を持ったカフェ像を描いていきました。

調査結果を基にして描いたカフェ像ですが、実験的に開設してみてその結果を検証したいと考え、「プレカフェ」を企画、立案しました。博物館の教員連絡会議で、このようなプレカフェを開設してみたいけれどもよいかとプレゼンし、教員からいろいろな意見をいただき、ゴーサインをいただき、実際に7月末の2日間、プレカフェをこの場所に開設いたしました。

これが当日の様子ですが、カフェのロゴですとか、ポットに付けるシールのデザイン、コーヒーを載



スライド7

せるトレイに敷くシートなど、学生たちがトータルにデザインしました（スライド7）。当時開催されていた企画展とカフェを連動させ、企画展にまつわる分子模型を描いたシートをトレイに置いたり、展示物に関連した冊子や百科事典などをテーブルに置くなど工夫して、2日間のカフェを開催いたしました。質問紙やメッセージボードで意見を集めた結果を分析した結果、学生たちにとって課題も手応えも感じたカフェになりました。

プレカフェの結果は博物館の教員連絡会議でご報告いたしまして、教員の側からは、今度は夏ではなくて、冬の閑散期に開設してはどうかという提案をいただきました。そして次回は、今から1ヶ月後ですけれども、2月26日27日、この教育GPの取り組みの1つである卒論ポスター発表会で、カフェも運営することになりました。そこではゼミの学生たちの一部が他の学部生グループと共にカフェを運営し、卒論ポスター発表会の運営も担っていく予定です。

次に、もう1つ、簡単にですが、展示評価のゼミについてお話ししたいと思います。文学研究科の佐々木亭先生の展示評価ゼミに、私が協力しております。当館の1階の一番奥にあります科学技術展示室をリニューアルすることになり、このリニューアル作業に展示評価ゼミの学生たちと取り組んでおります。

まず来館者調査に基づいた展示評価をいたしました。実際には調査は私と博物館スタッフでほぼ終えていたのですが、先ほどの落合先生の事例にもありましたが、学生たちにも調査を体験してもらいました。来館者の行動を観察して、どの展示を見ているか、どこで立ち止まって同伴者と話しているのかといった行動パターンを追跡するトラッキング調査と、面接調査を、まず学生にも数名分ですが担ってもらいました。その後、学生たちで調査データを分析しました。例えばこれは行動パターンを分析した図（スライド8）ですが、今日は時間がないので詳しくはご説明いたしません。他にも展示物の特質を考慮したストップポイントなども、このように分析してまいりました（スライド9）。トラッキング調査の分

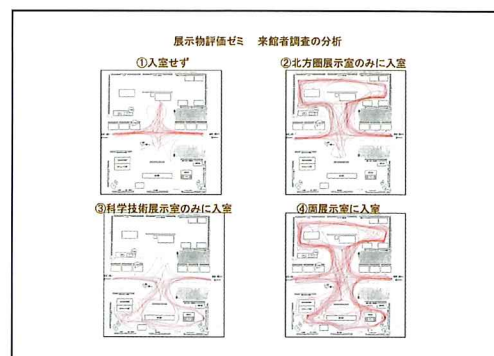
析結果を、面接調査やモニター調査の意見と合わせて分析し、学生たちによるリニューアル案をまとめていきました。

この展示室の制作を統括された工学部の先生とのディスカッションを経て、博物館の教員にリニューアル案をプレゼンして意見交換した結果、学生たちの提案は承認され、実施設計案を作成することになりました。この取り組みは2007年度の後期から今も続いております。今日はこの評価にかかわっている学生も聞きに来てくれています。今は実際に展示制作会社と一緒にリニューアルの実務に入っていく段階になっております。リニューアル後には、来館者によりよく見ていただけるようになったかを調査して検証していきたいと思っております。

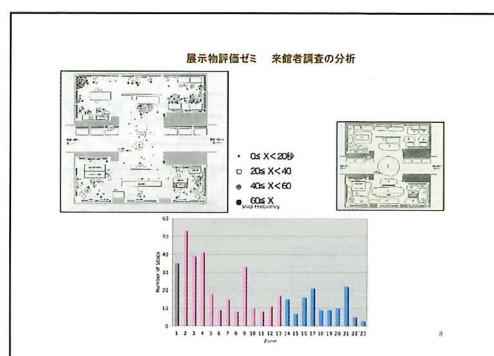
これまでお話ししました博物館コミュニケーション特論と博物館評価のゼミについては、学生たちが昨年の博物科学会で、取り組み内容と彼らが考察したゼミの意義について発表いたしました。博物科学会とは、主に国立大学の博物館が集まって開催している学会ですが、学生がこの学会で発表したのは北大が初めてで、ご好評をいただきました。今後も、学生たちがこの博物館を舞台にして実践し考察したこと等について学会発表していけるように支援したいと思っております。

これは博物科学会で学生が発表したときのスライドをそのまま借りてきたのですが、展示評価のゼミの学生たちが、ゼミを受講して何を学んだかをまとめた図です（スライド10）。まず来館者調査をしたことで、来館調査の方法やデータ分析の方法を学んだ。展示評価をしたことでは、まず展示の内容が分かっていたいなければ自分たちも分析できないので、内容に関する知識を得られた。それから展示の技術に関する知識を得られた。リニューアルへの提言をすることで、課題を解明する能力が得られた。それからグループでディスカッションしていく能力を得られた。博物館の教員にプレゼンする必要がありましたので、プレゼンテーション能力が付いた。そして実際にリニューアルの実務に入っていましたので、リニューアル計画の立て方などを学んだ。このようにに学生たちがまとめてくれました。

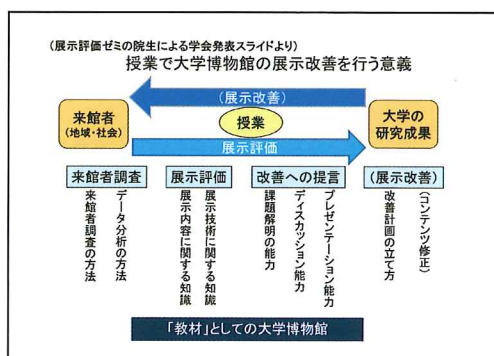
この2つの授業は、大学博物館の様々な活動に学生を関与させる教育プログラムといえると思います。そこでは例えば自身の研究の専門性を深める、それから異分野への関心が芽生えることもあると思います。学生たちが所属する研究室だけでは味わえないような学際的な視点を与えられるかもしれません。また、大学博物館、そして博物館そのものへの新しい視点を与えられるのではないかと考えております。グループワークをすることによって、そのグループワークは他の分野の学生もいれば、博物館に関連したプロフェッショナルもいる、そして市民ボランティアとの協働という場面もありますが、様々なグループワークをすることで自分の専門分野以外への関心ですとか、協調性、プロジェクトを運営していくマネジメント能力を身に付けられるのではないかと考えております。それから社会へ情報発信すること



スライド8



スライド9



スライド10

でプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、責任感を身に付けることができるのではないかと考えております。

私は意識的に成果物を残すことでも、学生たちに達成感を与えたいと考えています。そして活動評価の視点をかなり強く求めます。自分たちの取り組みは果たして独りよがりになっていないか、来館者にどう受け止められたのか、社会にどのような波及効果をもたらしたのか、そこに課題や改善点はないのか、次はどうするのかという視点を持つように指導しております。また、社会人としての作法も伝えたいと思います。例えば博物館の教員にプレゼンする方法ですとか、業者の方とのやりとりですとか、メールの書き方。博物館という場を利用するには館内でも様々なコンセンサスを得なければならず、スタッフへのあいさつの仕方ですとか、問い合わせメールの書き方、そういうこともこの授業で学んでほしい、そして学んでいってくれていると考えております。

では、最後に短く、北大の教育 GP の展望についてお話ししたいと思います。最初に高橋先生がご説明なさった博物館の資源をフルに活用いたしまして、このように3つのステップからなる教育システム



スライド 11

をつくらせていきたいと考えております（スライド 11）。そこでは課題探求の能力ですとか、協調性、自主性、問題解決能力を持った学生を育てることを目指しております。これらの能力というのは、学芸員や研究者にならなくとも、社会人として生きていく上で必要な能力ではないでしょうか。そこがポイントだと思うのです。博物館学芸員になりたいからこの授業を受けるというのではなくて、学芸員志望ではなくとも、このような能力は社会に出ていってこそ役立つ、社会人として生きていく上で誰もが身

に付けていかなければならない、そういう能力だと思います。それを身に付けることができる教育を、この博物館で実践していきたいと考えております。

3つのステップからなる科目群を設定いたしまして、それぞれの科目にクレジットを設定し、3つのステップの科目から基準単位数を受講して、一定水準の成績をおさめた学生には、北大のミュージアム・マイスターという称号を与えたいと考えております。博物館で既に実施している授業や取り組みにいくつか新しい授業を加えて、カリキュラムを組みます。例えば導入科目では、現行の「今、大学博物館が面白い—『物』にこだわる科学」と「北大エコキャンパスの自然と歴史」という2科目に加えて、新しい博物館講座や文学部で実施している博物館の学芸員資格取得に関連する科目などから成るこのような科目群を提示して、この中から例えば4クレジットを取得できれば、導入科目としての最低基準をクリアするというシステムを考えています。

ステップアップ科目では、現行の「ヒグマ学入門」と「北大総合博物館で学ぼう！—自然と人間」という2つの科目に、例えば先ほど高橋先生からご紹介がありましたパラタクソノミスト養成講座などを加えて、パラタクソノミスト養成講座の2日間のコースを受講したら何クレジットと設定して認定していきたいと考えています。まだ検討段階ですが、高橋先生が主宰されている大学院の共通授業も学部生が受講できるようになればと考えております。私が授業終了4カ月後にフォーカス・グループ・インタビューをしたヒストリカル・カフェの学生たちの言葉ですが、こういう授業を学部生の頃に受けたかったとのこと。学部の頃ではもしかしら発表を担うまでには至らないかもしれないけれども、大学院生と協働することによって、大学院生が発表して、学部生はその運営を手伝う。そして自分が大学院生になる頃には発表する側に回りたい。このように体系立てられた授業になったら、ぜひもっともっと参加したかったということを言ってくれました。協働という意味もありますし、ステップを踏んで

いくという点でも、大学院の授業が教育 GP のシステムに組み込めるかを、これから全学の先生方と一緒に検討していただきたいと思っております。

そして社会体験型科目では、当館では既に展示解説ボランティアが活動しているのですが、その取り組みと、あとは学生企画の様々な単発のプロジェクトがありますので、それらを連動させて実施していきたいと考えています。そして様々な学部の学生の卒業論文のポスター発表という企画もこの場で開催する予定です。また、エコミュージアムのエコキャンパス・ツアーづくりの活動を実施したいと思っております。今日ご紹介した博物館コミュニケーションのゼミや、来年度私が新たに他の先生方と一緒に開講する大学院の展示制作・教育・活動評価の授業なども組み込みたいと考えています。

今までは学生教育の観点からお話しましたが、大学博物館の存在意義について考える際、北大の場合は 400 万点以上の学術標本、研究教育機関としての力、博物館活動の実績がまず資源として考えられると思うのですが、そこにさらに学生がいるということは大学博物館の強みになっていくと思います。学生自身をこの博物館活動の担い手とするというのは、今日、ご発表いただきましたすべての先生方の取り組みに共通していると思いますが、大学と社会をつなぐ接点として学生たちが活動することが、とても重要になるのではないかと思います。

一方、市民の方々の期待もあります。学生を活動の担い手としたワークショップを開催しますと、市民の方々から北大生は普段は何をしているのかを知りたいというご希望をよく伺います。学生を知りたい、その学生を通して博物館を知りたい、学生を通して大学を知りたいという声がとても多いです。大学で広報がなされていますが、市民の方にとってより身近な学生が大学や博物館の活動を伝える担い手となるよう教育することは、研究教育機関である大学博物館の可能性を示す一つの重要な手段であると確信しております。この教育 GP の取り組みを通して、大学博物館の学生教育を新たに進めていきたいと思っております。

最後に私個人の話をさせていただきます。私は東京大学総合研究博物館の西野先生の博物館工学ゼミの一期生でした。西野先生のゼミで様々なことを体験させていただき、多くのことを学ばせていただきました。大学博物館育ちといってよいかもしれません。北大にまいりまして、北大の大学博物館育ちといえるような学生を育てていければよいと思っております。

この教育 GP の取り組みは、社会の皆様と一緒につくっていくものだと思いますので、ぜひ、皆様にも関心を持っていただいているいろいろご意見をいただきながら、3 年間のプロジェクトを遂行していきたいと思っております。以上です。ありがとうございました。

(高橋) ありがとうございました。最後にかなりまとめ的な話が出まして、うーん、ここまでやれたらいいという気持ちに、個人的にはなっていますが、一番最後の話も含めて、時間もある程度進んでいますので、最後に全体を通してご意見やご質問ということにしたいと思いますが。

いくつかキーワード的なものも出てきましたが、ちょっと私が聞いていて少し頭に残っているのは、展示制作そのものを教育に生かすということでしょうか。この辺はなかなか博物館外の方には展示というのはできたところしか見ていませんので、その制作にどういう過程があって、その過程そのものが教育といいましょうか、そういうものになるというのは、もしかするとあまり気付かなかったような視点なのかなという感じもします。

あとはこれは大学教育の方になるのでしょうかけれども、自己肯定、他者肯定というのですか、向きを変えた、あるいは自己を相対化させる、そういうことができるような人間を育てていくという、全人教育というところとかかわるところ、北大も全人教育を目指しているのですが、やや具体的に今のような報告を聞いていて実際のあるべき理想像みたいなものが、ちょっとずつ明らかになってきたかなという

気がして聞いていました。

それと大学博物館特有のやり方かもしれませんが、ああいう活動履歴を比較的ちゃんと記録しながら教育をやっていくとか、あと活動評価でしょうか、この辺もかなり一生懸命やっているというあたりは、なかなか普通の大学の学部の教育とはやや趣の違う、面白いといいましょうか、いいところかなという気がして聞いておりました。

何かどうでしょう、大学の博物館のこういった今日は4題、いろいろな方たちから先進的な取り組みがされまして、1つ気になるのは大学の方の全体の教育システムの中で、こういう博物館教育をどう生かしていけるのかというあたりが、もう1つ。博物館はちょっと我田引水的になりますが、教育活動でもかなり頑張りだしたという気はしているのですが、さてさて、それを大学の学生教育となった場合、どうなのかなというあたりが次の議論かなと思っていますが、安藤先生、小野寺先生あたり、何か。すみません、何か無理強いしているようで（笑）。

総合討論

(小野寺) ……鹿児島大学の先生みたいに、特色あるようなものをつくっていければいいのではないかと。西野先生とも大野先生とも、先生のキャラクターが非常に出たようなプロジェクトになっている気がしますので、あまりそう最初から一生懸命やらなくても、終わるころには何点か、全国に発信できるような事例ができればいいというぐらいの形で、やっていただければいいと思います。

教育改革室としては、今、お話を聞いたこと、湯浅先生にお話しいただいたことは、わりと実現できるのではないかと思います。いろいろな形でお手伝いができると思いますので、頑張ってください。

(安藤) 安藤と申します。今日は西野先生、大野先生、落合先生、それぞれ大変有意義なお話を伺えて感激しました。ミュージアムエデュケーションとか、ミュージアムテクノロジーとか、そんな言葉もあるのかと感心しました。小野寺先生は理学部ですが、私は文学部で、それもロシア文学という、あまり人の役に立たない分野を専門にしている、博物館の話を聞いてまずうらやましいと思うのは、とにかく目に見えるものがあるのはいいよねと思って聞いていました(笑)。

私が一番うれしいのは、このGPを、高橋先生と最初に申請書を書いてから3年目でやっと取れたことです。苦節10年に近いのです。最初は現代GPの環境教育のところで出して、北大の豊かなキャンパスを教育の場として使っていこうという発想で書いて、結構、自信はあったのですが、ヒアリングに行ったら正課の教育に役に立つのかと言われて、落とされたそうです。

今回はそれから2年たって、正規の北大生の教育にどういう貢献ができるのか、高橋先生がずいぶん苦労されたと思います。今日の説明を伺うと、説明がやや硬くなりすぎたかなと思いますが、博物館のいいところで、具体的な物があるので、実際に参加する学生は喜んでくれるのではないのかと思います。

北大では、4つの教育理念、①フロンティア精神、②国際性の涵養、③全人教育、④実学の重視の下に、4つの教育目標がありまして、①高いコミュニケーション能力、②社会・文化の多様性の理解、③創造的な思考力と建設的な批判能力、そして最後に、④社会的責任と倫理の自覚というのが、アンケートで学生に聞いても、あまり身についていないという、これをどうするかがずっと課題になっています。

最近出た中教審の学士課程教育答申でも、「各専攻分野を通じて培う学士力」として、倫理観、市民としての社会的責任などが挙げられ、「学生の主体的な参画を促す授業」、「体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れること」などが、期待されていますが、なかなか、いい手段・方法がない。

北大のコアカリキュラムでは、講義+事例研究の形式の倫理科目(生命倫理、技術者倫理など)を開発しています。医学部や薬学部では倫理教育をやっていますが、講義だけで倫理やモラルが身に付くはずもないし、社会的な判断力が付くはずもない。そういうところで、今日のお話が何か役に立つのではないかと、思っています。

それから、教育GPは毎年、結構な予算をもらって、自由に学生教育をして、それでコストに見合った成果が得られているのかという議論は当然あるでしょうが、今のところは、期待を込めて、大丈夫かと思っています(笑)。

(高橋) どうも、ありがとうございました。ちょっと北大内の話になってしまいましたが、いろいろ全体としては鷹揚に見てくれそうなので、博物館はもうちょっと色を出しながら自由にやってくださいとか、そんなに頑張り過ぎなくてもいいですよという励ましの言葉だったかとお聞きしたんですが。ほかにどうでしょうか、もうちょっと話を広げてもいいのですが、大学外の方からも、ああ、博物館はこんなことをやっているかでもいいですし、いや、もうちょっとこういうこともとか、何か。比較的、博物館に関連ある方が今回の聴衆の方たちに多いようですが、ご自由に何か。

(谷古宇) 文学研究科の谷古宇と申します。大学博物館で何かやるというときには、結局、展示、展覧会に結び付いてくると思うのですが、主に西野先生と落合先生にかかわる質問が2つあります。1つは、展示の質をどうやって維持しているのかということ、もう1つは、物があれば誰もが関心を持つというわけではないので、学生の話はどうやって聞きだしているのかということをお伺いしたいのですが。

質に関しては当然、新丸ビルとかエルメスなどでやる場合、学生がやっているから7割ぐらいの出来でいいのだというわけには、当然いかないですね。100%の出来にしないとイケない。西野先生のご発表のスライドというのは非常に美しく、写真もプロが撮ったのかと思えるような感じがするぐらいです。ああいったところは学生の方が優秀な能力を持っている部分というのはいっぱいあるというのは、知っていて言っているつもりなのですが。

西野先生の才覚だけであれだけ素晴らしい、100%の演出、展示をしているのか、あるいはやはり何らかの形でプロフェッショナルがかかわって、カタログも完全に出版できるような形にされているのか、そういった質に関すること。これは台湾でやられた展覧会もそうですが、もう1つは研究者として100%以上のことをして、それを学生に言っても後を学生に任せてしまったときに、その内容自体というのはすごく落ちてくるようなこともあるかもしれないのですが、そういったところも質の問題と絡めて教えていただければと思います。

もう1つ付け加えて言うと、新しい取り組みに対して、教員はあまり熱心ではないということはよくあると思います。それはどうしても何か尻ぬぐいをさせられるみたいな悪いイメージがあっただと思うのですが。例えば書類の書き方1つを取っても、学生にやらせると何か完璧な物を作ってくれない、どうしても自分で直さなくてはいけない、それで数時間、時間を取られてしまう。そういったイメージというのはどうしてもあって、何か学生と一緒にやりたくないなというところも結構強くあるのです(笑)。

そういったところをどうやってクリアされているのか、そのあたりのことをお話いただければと思います。

(高橋) 展示でちょっとかかわったところで、東大とその辺ですね。

(西野) 質の問題ですが、私が主体でやることに関しては、私は別に展示のプロということを言う気はないのですが、少なくとも社会の一般の方々に見ていただく以上、一定の水準のものでなければだめだと思います。そういう意識は持っています。だから限りなくプロに近い仕事をやるということを、学生が私の後ろ、あるいは脇で見るという1つの教育の方法があると思うのです。

もう1つは学生に全権を委ねる。しかし機会をみて、私がアドバイスをすることで、例えばファッションショーをやるということでインヴィテーション・リスト、資料の作り方、あるいはその他のグラフィックス、展示等について1年間かけて、もう何度も学生とやりとりする。学生は黙って自分たちでやれと言って持ってこさせたものに対し、ここがだめ、あそこがだめ、はい、顔を洗って出直してきて、と執拗に繰り返し続けて、最後の日を迎えることになる。

ならば、自分の感覚が最終解なのかと確かに問われたら、そうも言えない。しかしこれよりこちらが良いということだけは言える。だから、ベストの答えは用意はできない。しかし、こちらよりはこうした方が良くなるだろう、あるいは問題解決、ここには問題があって、それを解決するとたぶんもっと良くなる、と言いつつ学生に接しています。

学生の授業も学生が主催するイベントも、東京大学総合研究博物館主催という形式でおこなわれる。プロデューサーとして、私に責任が100%あると理解していますが、学生のものに関しても基本的には総合研究博物館の名前でおこなわれる事業である以上、湯浅さんが盛んに強調されていた責任感、つまり大学の名前に傷をつけないよう質を高めなくてはならないわけです。

ですから、現場でのやりとりはかなり厳しいし、泣く学生もたくさんいます。しかし、私は学生との

付き合いに関して、教育に関して、真剣勝負を求めます。だから絶対に妥協はしません。そのことをゼミの初年度の最初の第1回目に、私は学生に言います。つまり本気でやるから、本気でやる人以外来なくてくれと。それが大学博物館の名前で事を行うことの責務だと私は思うのです。

だから中途半端な形で学生との妥協の産物みたいなものだったら、やらない方がいい。やる以上はベター、ベター、ベターというものを積み上げて、ベストに近いものを持っていくという、かなりそのあたりは学生に厳しく、自分たちのやることの社会的な責任感というものを語るようにしています。

(落合) 私の立ちの位置に関することについてお話しておこうと思うのですが、私はトラベリングミュージアムの展覧会をつくる時には、研究者という立ち位置とプロデューサー、展示全体に責任を取る人という2つの顔を使い分けるようにしています。学生が出してきた提示に対して、研究者として絶対に許せないときには絶対ノーと言います。例えば今回の台湾の展示で、私のプレゼンテーションの中でキャラクターが出てきたのを見ていただいたのですが、あのキャラクターは植物の種の形態を基に作っているのです。

あれ以外に実は複数のキャラクターを出してきたのですが、それが分類学的にどうしても許容できなかったのもので私はノーと言いました。かわいいキャラクターを出して、子供たちに楽しい雰囲気で見せたいという意図は分かるのですが、植物学的に間違っただけを伝えるのは私は絶対したくないということ、研究者として学生に伝えて、それによって学生がどう判断するかということを聞き出すというプロセスを、あえてつくって見たわけです。

そのやりとりをずっとやる。学生たちが何を結局それでしたいのですかということをとことん突き詰めて聞いて、それに対してここはできるけど、ここはできない、だったらこういうことをしてみようかといったことを、どれだけ聞き出せて待てるのかとか、そういうことを私たちに逆に問い掛けられている、やれるかどうかということ私たちに試されているような、そういうものが展覧会づくりではないかと思います。

最終的に学生自身が満足したらいいというのが到達点でないということ、意識的に伝えます。それは見てくださった人にとってどうか。第三者の目ということじゃないかと思うのですが、見てくださった人とか、展覧会の会場は今回、大学の中でやるかというアイデアもあったのですが、あえて博物館という公共の場に出したというのは、どこまでそこで本気度が出せるかということをあえてやってみようということ、大学の先生たちとお話ししたところだったのです。

史前館の人たちが史前館の企画としてやる以上、それにかなうものであるということを学生たちにも分かってもらって、その上で取り組む。まさに西野先生が、今、おっしゃった本気でない学生は来なくてくれということと同じなのですが、それを試験的に、実験的にやる状態を私たちも意識的に作り出すことによって、結果、出来上がった展覧会の質を維持するということをしてきたとお答えしたいと思います。

(谷古宇) どうも、ありがとうございました。

(高橋) いいでしょうか、質問の……

(西野) もう1つだけ、付け足させていただきます。北大も、東京大学の総合研究博物館も、大学博物館として社会に生まれ落とされてから、それほど長い時間が経っているわけではない。ですから、1度のつまらないことで、今まで積み重ねてきたことが一気に崩れる虞もある。土台が弱いというのが、大学博物館だと思います。どんなに良い展覧会とか企画を続けても、1度たがの緩んだものをやっただとたん、大学博物館など所詮はその程度のもの、と一般のミュージアムの関係者に言われかねない。それを私は深刻なことと考えます。

1度もたがを緩めてはいけないということ、大学博物館ができて10年かそこらという段階では、つねに頭の中に入れておかなければならないと思います。ですから、つねに真剣勝負でなければいけな

いのです。

(高橋) ありがとうございます。何しろ大学博物館は東大からできましたものですから、東大がトッププランナーということでいろいろオピニオンリーダーとして言っていて、我々もちょっと背筋を伸ばしてやらなきゃいけないという部分も大変ありまして。どうでしょうか、皆さん、それ以外にも気軽に。

(参加者 C) 今日は4つの大学それぞれの面白い話を、どうもありがとうございました。私は大学の博物館というのは大学の図書館と同じように、大学と社会との結び付きで非常に重要なところだと思うのですが、そういう意味で社会の要求というかニーズというか、そういうものをきちんとくみ取らないといけないということですね。

いろいろな展示とか企画の後にはだいたいアンケート調査をしますので、それを通じてどういうことを求めるかということは分かると思うのですが、それ以外にそれぞれの大学で社会の要求をくみ取る装置として、やり方として、例えばモニター制度とか何かそういう仕組みを考えておられるのか、あるいはやっているのかどうかという、どういうことをやったらいいのかなということを考えておられるか、その辺をお聞きしたいなと思ったのですが。

(高橋) 博物館の発想そのものに近いですね。

(大野) そのところを聞かれますと非常に、特に京都大学の博物館の場合には、外部の方というよりは、学内のさまざまな学内における有識者の方からなる協議会というところで、いろいろな意見はいただいていると思います。まだ実は我々の博物館は本当の意味の外部の評価をいただいております。それを極めてまずいことだと私は思っています。

今日、私がお話ししたことで評価ということを入れていますが、これは私がやっている中では、自分1人でももう当然いろいろなことをやりたいという思いはあるのですが、教材1つの提示の仕方についても、専門の方に個々の局面ということになってしまうのですが、それはそれなりに評価をいただいて。要するに我々も研鑽していかないといけないということで、私自身、評価を入れていきます。

入れてみてどうかという、これはやはり極めて重要なことです。それをどのようにして館全体としてそれを受け止めていくかということが、今後大きな課題になると思います。京都大学は東大に次いで2番目にできまして、非常に立派な建物を造りました。展示空間も素晴らしい空間があるのです。それを100%活用しているかといわれますと、移動博物館で全部貸してくれと言って、ここでやられたら負けるかもしれない。

勝ち負けはどうでもいいですけど、本当の意味での企画力というところになってくると、京都大学の器は立派にあるのですが、どこを向くかというのが我々にとってのものすごく大きな課題としてあります。学内のいろいろな先生方とか学外の人たちの知恵を、こちらも提案しますが、今はどう知恵をうまくいことお借りしながらやっていけるかというところを、模索しているような状況であります。

私は自戒を込めて言わないかんことは、京都大学というのは日本の大学の中で2番手なのです。次男坊というのは何をしてもいいのですということになっているのです(笑)。だから東大、京大はつぶれないだろうと思っている先生というのは周りにいっぱいおられます。だけど京大がつぶれるときにはすつつぶれると私は思っています。なぜなら準備をしていない、危機に対する対処の仕方が非常に甘い大学です。

ですから今のところはお国の施策として生かしていただいておりますが、それは教員の努力かどうかは私は疑わしいと思います。10年に1度、ノーベル賞を今回でも、名古屋大学から来られた先生が取られているものも京都大学の成果にしてしまえば、あと10年は食っていけると思っています(笑)。私はそうなると思っています。

(西野) 全然、答えてないですね(笑)。外部評価を、私どもは13年目ぐらいですが、やはり6年に

1度ということで2度やりました。今日はお話ししませんでした、やはり外部評価ということになると博士号取得者を何人出したかとか、あるいはアーカイブ事業でどれぐらいのコンテンツを蓄積し、それがどのぐらいのヒット数を数えているかとか、あるいは一般的に理系の人に分かりやすい例だと、サイテーション・インデックスとか、あるいは『nature』『Science』に何本、論文が掲載されたかとか、いわゆる外形的なデータを顧みるということは2度の外部評価の中でやりました。これは、たがを締め直すための非常に良い機会でした。そちらの展示、公開だけでなく、研究教育の内容を自分たちで顧みるということも、大学博物館として大切なことだと思います。博物館は研究教育をやる場所だ、とつねづね言い放っているわけですから。そのデータを常に持つということも大切だと。

また、いくつか展示評価報告書をご覧いただきましたが、あれは紙つぶてとしてすごく有効です。次のプロジェクトのための予算獲得、あるいは次のプロジェクトのための機会を獲得するとき、コストのかからない武器として役立つ。だから必要なのです。この紙つぶての効果は、もっともっと認識していただきたいと思います。やりっ放しでは、だめなのです。

(高橋) どうも耳に痛いことばかりが東大の博物館からは出てくるので、コメントのしようがないのですが。どうでしょうか、博物館そのものの活動の方にも、今、いつているのですが、学生教育の方に戻って、もし何か一般の……

(湯浅) 玉川大学の菅野先生です。

(菅野) 玉川大学の菅野と申します。今日は大学博物館で、しかも全人教育に絡めてというテーマでしたので、ぜひ、聞かせていただこうと伺いました。大変、有益なお話を先生方から承って感動しているところです。私も大学の博物館に勤務しているのですが、いわゆるこちらの博物館のように、学術審議会の答申に基づいてつくったような博物館とは、成り立ちが違う博物館ですが、ただ私どもの大学でも1年次教育をどうしようかというのが、喫緊な課題になっていることもありますし、またそこに博物館としてどういふかわかりがでるかというのを、ちょうど今、模索をしている最中でして、今日のお話は大変参考にさせていただけるものがあつたと思います。

ただお話を聞かせていただいた事例が、ごく一部の関心を持った学生たちが、進んで博物館にアプローチして、あるいは開講している授業科目を取って活動するという報告であつたわけですが、とにかく全学の学生を対象にしてどうするかというのも、今後の大学博物館にとって大変重要になってくるのではないかなと。うちの大学あるいは博物館の水準からいうと、大学の授業で行うには、まだまだ相当な時間がかかりそうな段階ですので、むしろ全学的な私立大学ですので学生サービスの部分も含めて、どういふことができるのかなというのを今後も考えていかなくてはいけないと思っているのですが。

その中でも今日お話しいただいて、大変大きな参考事例として、これからの検討の材料にさせていただきたいなと思っております。すみません、ちょっとテーマからずれた話だったかもしれませんが。

(高橋) いえいえ、ありがとうございました。大学の大きさもあるでしょうし、大学博物館の置かれている事情も違うので、どちらもあり得るかなと。

(安藤) 玉川大学の先生のご発言をうけて、北大の全学教育における体験型学習について、ちょっと紹介させていただきます。もちろん博物館に北大の全学教育を全部丸投げしようとか、そんな意図は毛頭ありません。北大の全学教育は、平成15年度に採択された特色GPでは「進化するコアカリキュラム」と呼んでいます。平成13年度から始まったコアカリキュラムの目玉は、函館の練習船、静内の研究牧場、雨龍・天塩の研究林、厚岸の臨海実験所などを使ったフィールド体験型演習です。北大は道内に20ヶ所近くの地方施設を持っていますので、それを使ったフィールド体験型の一般教育演習（フレッシュマンセミナー）を、組織的に開発してきまして、平成20年度は14科目、350人ほどが参加しています。一番人気の高い水産学部の練習船での演習は、往復で80人が参加し、ほかに水産学部の1年生約200人全員を乗せる「基礎乗船実習」が行われています。

さらに、平成16年度採択の現代GPでは、地方施設を束ねる北方生物圏フィールド科学センターと、水産学部、文学部による、市民教育（大学開放事業）と北大生の教育とを組合せた体験型学習の取組みがあり、そういうものの次の段階として、今回、博物館の取組みを打ち出しているということです。

ただ、これでも新入生2,600人全部にはとても行き渡らないわけで、さらに、初年次教育だけではなく、高年次まで含めた体験型学習といった課題もあり、そこをどうするのかというのは、まだちょっと遠い先の話です。私ども、高等教育機能開発総合センターでは、私は高等教育の担当ですが、生涯学習の研究部にもいろいろ話を聞いて、例えばICUのサービ斯拉ーニング（社会体験型教育、国際ボランティア）とか、同志社大のGPの取組み、学生提案型・公募制のプロジェクト科目とか、いろいろな多様な取組みに注目しています。その中で、北大の博物館にも大きな可能性があるかと考えております。（湯浅） 先ほど谷古宇先生から学生のモチベーションというお話が出ましたが、とてもラッキーなことに博物館に来てくれる学生は本当に夢中になって参加してくれます。ただ出口教育というような私がご紹介したような取り組みは、お祭り事のような楽しい取り組みで終わってしまう可能性も高いのです。学祭で行うような楽しいイベントで終わってしまってはならないと思っておりますので、そういうときに自己評価の視点というものが意味を持ち、だからこそそれを学生に課しております。これは学生教育の意味からも意義がありますし、博物館運営の面からも評価を残していくということは、西野先生がご指摘くださったように重要なことだと思っております。

（大野） 質問をしてもよろしいでしょうか。すごくGPの積み重ねをしてきたと思いましたが、例えば私が京大で考えていますことは、既存のものとの組み合わせることによって力を発揮するものもあると思って、キャリアパスの多様化の支援というようなことで、それならよく我々の大学でも、すごくサクセスストーリーを持った方を高い講師料を払って呼んできてお話を聞くと、それはそれで素晴らしいですけども、実際にそれと僕らの能力との間をどう埋めるかということを考えた場合に、例えば博物館でまさに展示の解説というものを積み重ねることによって、コミュニケーション能力を高めるということもあり得ると思うのです。ですから1つはそういうキャリアパスの多様化というものと連携になるのが、北大などでうまく考えられておられるな。京大では一度、僕が非常にプリミティブに提案をしまして、相手にしてくれなくて悲しいのですけれども。

それからもう1つは、例えば北大でも教員の免許証の10年更新の講習を受け入れられると思うのですが、僕もしゃべりましたが、現場の先生方はそれなりの蓄積をお持ちの方も多いのです。確かに箸にも棒にもかからんのはおられるかも分からない。それは大学の先生でも、僕らみたいなのと一緒ですから、それを追うとすれば、そういうところに何か関与できるように、例えば理科ならパラタクソノミストの勉強をした学生さんがTAとかRAで入って、そして現場の子供たちを教えている先生方の悩みを聞いて、じゃあ、こんな生き物を飼育するのならどうですかとか、あるいはうちの学校の裏山にこんないっぱいおるから捕りにきたらとかというのはコミュニケーションの中で、社会とのつながりもできるかなと思うのですけれども。これは教育学部とかそういうところとの連携も必要になってくると思うのですが。

もう1つ、うらやましいと思ったのは、北大で大学院で共通のカリキュラムというのがあるわけですか。京大の場合ですと、博物館はどこかの研究科に雇われてやることはあるのですけれども、全学部の大学院生を受け入れるというのは、今、制度的にはないと思います。ちょっとようけい質問しました。（高橋） 最後の例は北大の先進的な面かもしれないですね。大学院の共通授業というのがあるって、みんな提案して、こういうものをやりたいですとやると、その会で認められれば、いいでしょうということになれば、いろいろな大学院の学生を受け入れて大学院授業をやると。先ほどの提案はそれをそれぞれベーシックな部分ですので、学生もやる気がある、それなりの能力のある学生であれば、例えば3年生以上なら、そこに参加してもよろしいと。

大学院授業ですから学部生に単位をあげるわけにはいかないのですが、そういったこともできればかなり優秀な人間にはモチベーションになっているかなという気はしますけど。あとは教員の人たちの免許の更新というのでしょうか、それは我々のところではやってはいないですけども、将来的には可能性というかやりたいなと思っています。

それと最初の方のキャリアパスとかこの辺は気にしているところですが、今、私のおぼろげに考えているのは馬渡先生たちがグローバル COE で提案しているようなものがあって、そういう中でもう 1 つ、今、ポスドクで専門性だけが先鋭化していくと、結局、就職もなくて非常に大変なことになってしまう。そういうときに博物館、こういう能力はもしかすると一般の社会にとっては求められているかもしれない。

専門性もあるけれども、こういう人間性の教育とか、そういう中でワンランク上のグローバル COE みたいなところでそういうものを見続けて、教育 GP とつながるような形で持っていければ、まあまあやれるかもしれないという夢だけは持っています。そこでまた関連するかもしれないなどだけ。

(安藤) 大学院共通授業は、北大では平成 12 年から 10 年近くやっています。平成 20 年度には 70 科目ほど開講され、単位を取得する者が約 1,000 人です。国内では北大が一番早くからやっていますが、2 年前に九州大学が始めて、最近では阪大や東大でも始まるそうです。

それから、全学教育には、コミュニケーション能力とか、総合的判断力とかを育むという目標がありますが、最近では学内でいろいろ議論していくと、いや、そういう能力は、大学院生こそ必要だという声がよく聞かれます。

北大では、テニユアトラックの取り組み（キャリアパス促進事業、S-cubic）を踏まえて、「博士課程では、身につけた専門的能力を実社会で発揮できるように体験型育成プログラム（国内外でのインターンシップ、国際若手シンポジウム、キャリア意識改革教育など）を開発・推進する」（平成 20 年度採択大学院教育改革支援プログラム「融合生命科学プロフェッショナルの育成」）といった取り組みもあります。そういう文脈では、大学院共通授業には大学院レベルのコアカリキュラムの役割もあるかもしれないと言われていきます。

ただ、北大の大学院共通授業は、そもそもの始まりが生化学とか、その後は、脳科学とか、新領域を広めていくという面が強かったのです。それに対して、九州大学は、最初から大学院での共通教育（コアカリキュラム）という位置付けで始めておられると聞いています。

(高橋) ちょっと私の時間配分が悪くて、いろいろな議論が出てきて面白くなってきたところですが、これでやっていくとずっと終わらなくて収拾がつかなくなってしまうので、よろしいでしょうか。皆さん、すみません、時間をオーバーしてしまいましたが、少なくとも大学博物館が大学の学生教育でこれから可能性ある場所だということだけは、何となく頭の真ん中にかどうかは分かりませんが、隅っこには入ったと思いますので、これ以降も教育 GP の事業は続きますので、連続していろいろな形でこういったセミナー、シンポジウムをやっていきますので、これからもどうぞよろしくお願いします。

最後にお話いただいた 3 人の方に拍手をもって終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

2008 年度 北海道大学教育 GP シンポジウム
「大学博物館から拓く学生教育の未来」 報告書

編集・発行	北海道大学教育 GP 「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」事務局 〒060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 8 丁目 北海道大学総合博物館内
発 行 日	2009 年 3 月 31 日
印 刷	北海道印刷企画株式会社
